

¥1800

画報 風俗奇譚

目で見る風俗絵巻



凄艶緊縛女体写真集
恋虐陶醉悶悦秘画展

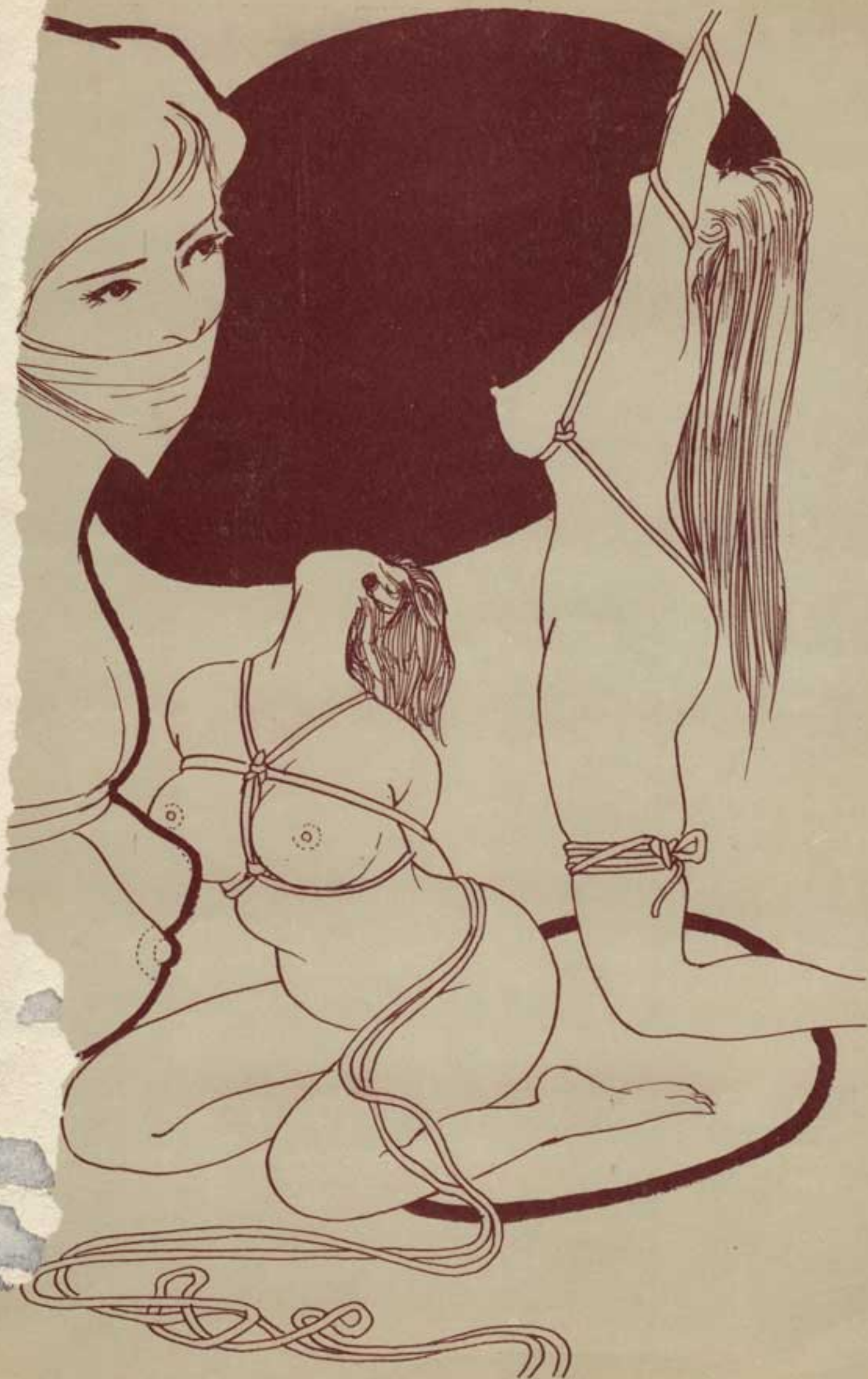
第6集
11月号

画報風俗奇譚 ⑥

目で見る風俗絵巻

画報風俗奇譚 ⑥
昭和35年11月15日発行（毎月一回1日発行）通巻第6号
昭和35年8月30日印刷（紙張：新聞紙）定価：180円

定価 1 8 0 円



画報風俗奇譚⑥ 11月号

定価一八〇円

昭和35年11月5日印刷
昭和35年11月15日発行

発行人 高倉 一

印刷所 刊行会印刷部

東京都千代田区神田神保町1の35
発行所 文献資料刊行会

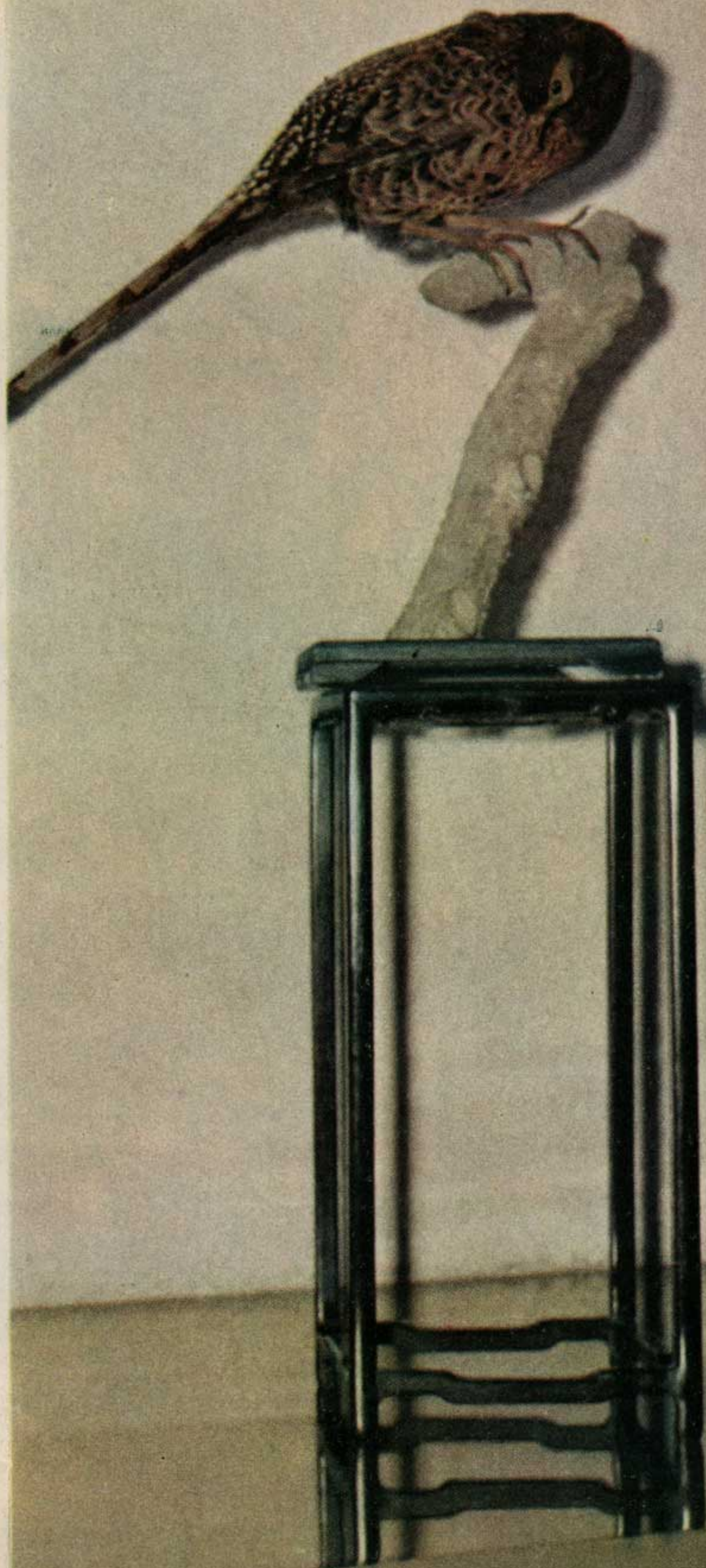
振替東京42494
電話(291)4230番

石橋の上に



広い庭の池にかかる石橋の上に 孤独なる緊縛の女 周囲の静寂と
孤独の寂寥さに包まれて しみじみと緊縛の法悦を噛みしめている

緊縛置き物



床の間のキジのハク製と並べて置かれた緊縛女体 これは血のか
よった置き物だ 白い肌を縄がさいなみ 身を動かすと乳房にく
いこむ ああ このひとときに 悦虐の息吹きがしずかに流れる



受縛絢爛

真紅の衣装が白い肌に映えて、それだけになまめかしく、女の陶醉感が、じかににじみ出している





嵌口具の一種 バネ仕掛けでしまるようになっている

絵石橋の上に……	三
緊縛置き物……	四
多色口紅受縛絢爛……	六

第1グラビア

壁上の呪縛……	(一一)
タイルは冷たい……	(一二)
しおり戸の前で……	(一四)
うしろ手のポーズ……	(一六)
ハダカの女人犬……	(一八)
色どりのある緊縛……	(二〇)
縛愁のひと……	(二二)
浴室の責め……	(二四)
ゴムひもしばり……	(二六)

絵吊つてくすぐる・アリ責め……	土居啓子(四三)
丸太流し・愛憎の果て……	江馬美久(四六)
責柱しばり・ムチのあと・肌を巻くベルト……	田上恵子(四八)

第2グラビア

はなやかな縛虐……	(二七)
石橋のうえの座臥四態……	(三〇)
法悦の時は流れて……	(三二)
露台の白魚……	(三四)
石と草のなかで……	(三六)
長椅子さかさ姿態……	(三八)

第3グラビア

華麗なるハリツケ……	(五一)
受縛の表裏……	(五四)
碁盤の上に……	(五六)
片手つり……	(五八)
残酷を運ぶ自動車……	(六〇)
禪姿二人ブレイ……	(六二)

(画集)ソドムの額縁7景……	雨上恵子・太(八三)
フォト・恐怖のドライブ……	志田悦郎(一一五)

アブチツクな写真集

サリィの体験……	田宮美久・男(九〇)
マミの正体……	江馬美久・次郎(九八)
悦虐の天国……	小田村利美・修司(一〇四)

演劇・緊縛ア・ラ・カルト

☆読者の広場……

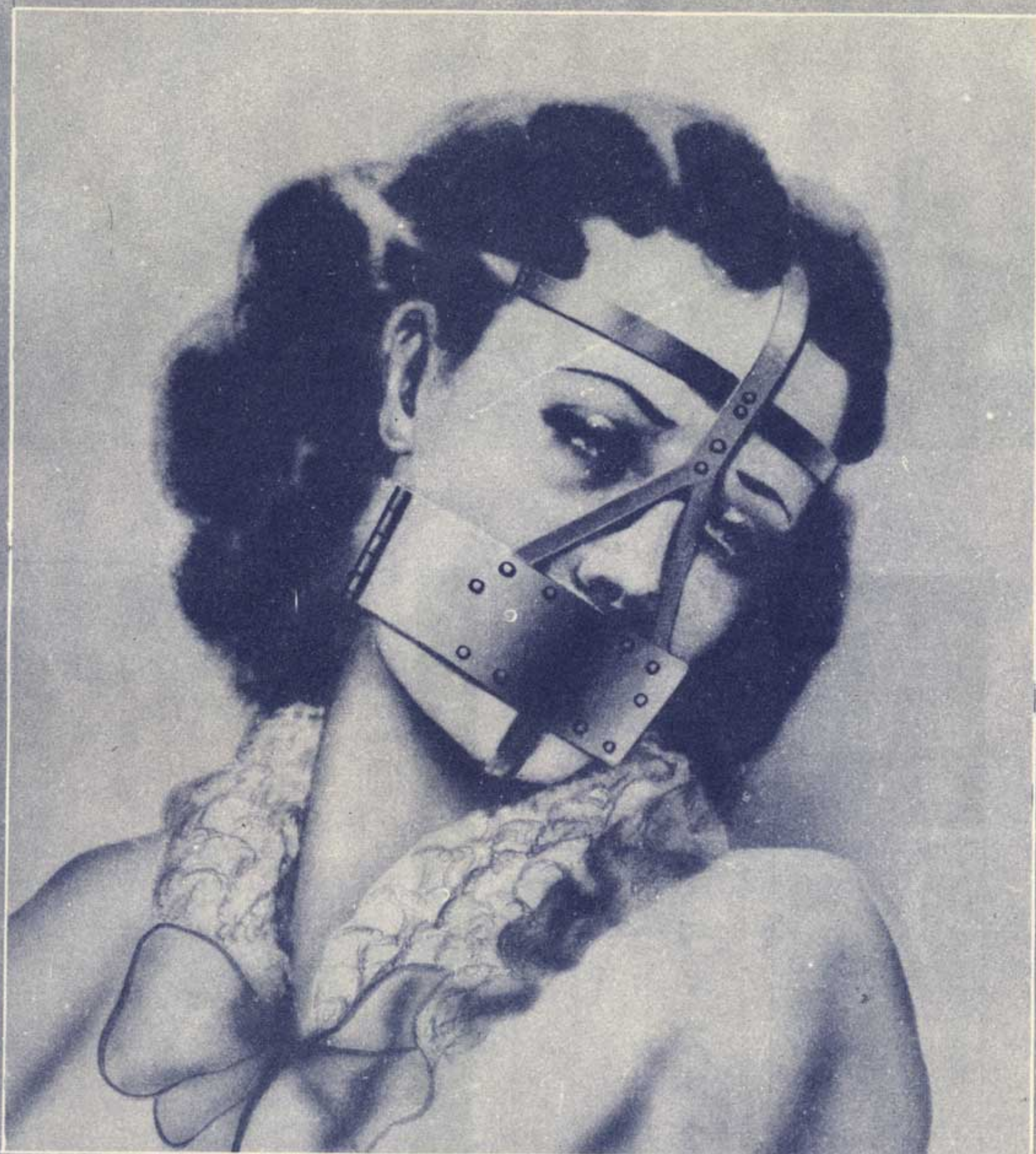
(一一〇)

ジョン・ウイリー

画集

若奥様のお出掛け……	(六七)
午前7時30分……	(六八)
コルセットをしめる……	(六九)
アンドロメダ……	(七〇)
クレオパトラ……	(七〇)
午後一時と午後八時……	(七二)
嵌口具の諸形式……	(七六)





懲戒嵌口具　むかし、イギリスやフランスで使用された嵌口刑具と同一のアイディアで作られたもの

壁 上 の 呪 縛



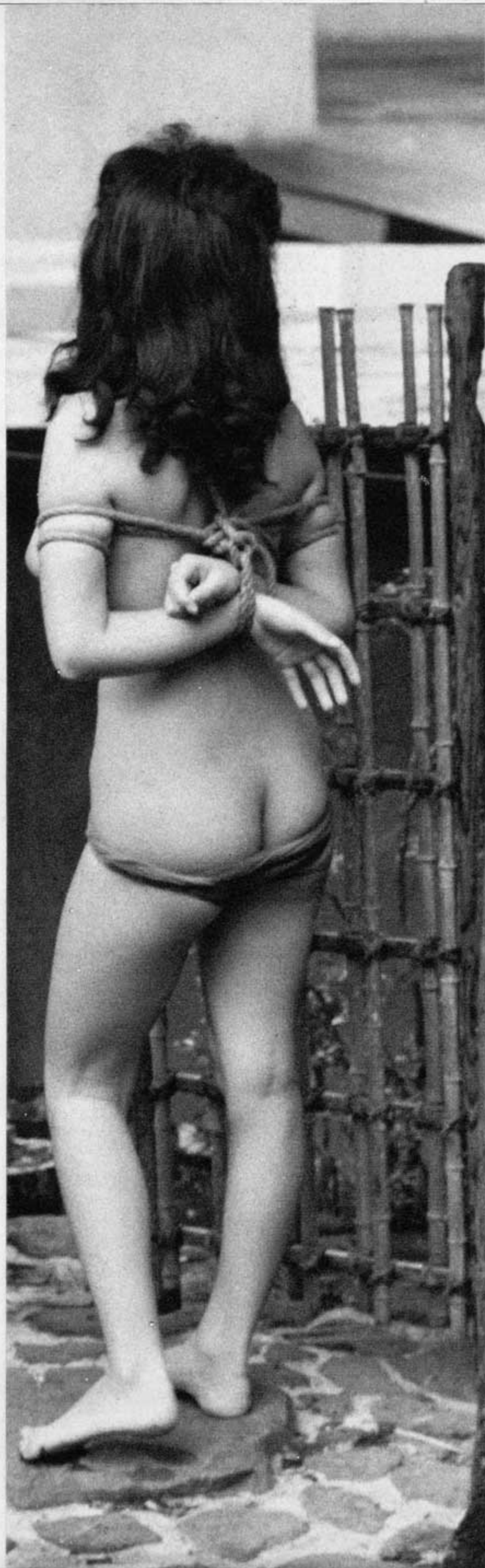
壁の上の　ちょっと突出したスペースに　緊
縛の肢体をのせる女　身動きすれば墜落する
し　そのままいれば　からだじゅうがしびれ
てくる　どちらにしても　ムゴイ仕置きだ！



タイルは冷たい

すわらされても 立たされても 床も壁
もタイル張りなので 肌に冷たい まし
て 縛られた裸体には 夜ふけの凍った
空気が からだのシンまで しみとおる





しおり戸の前で

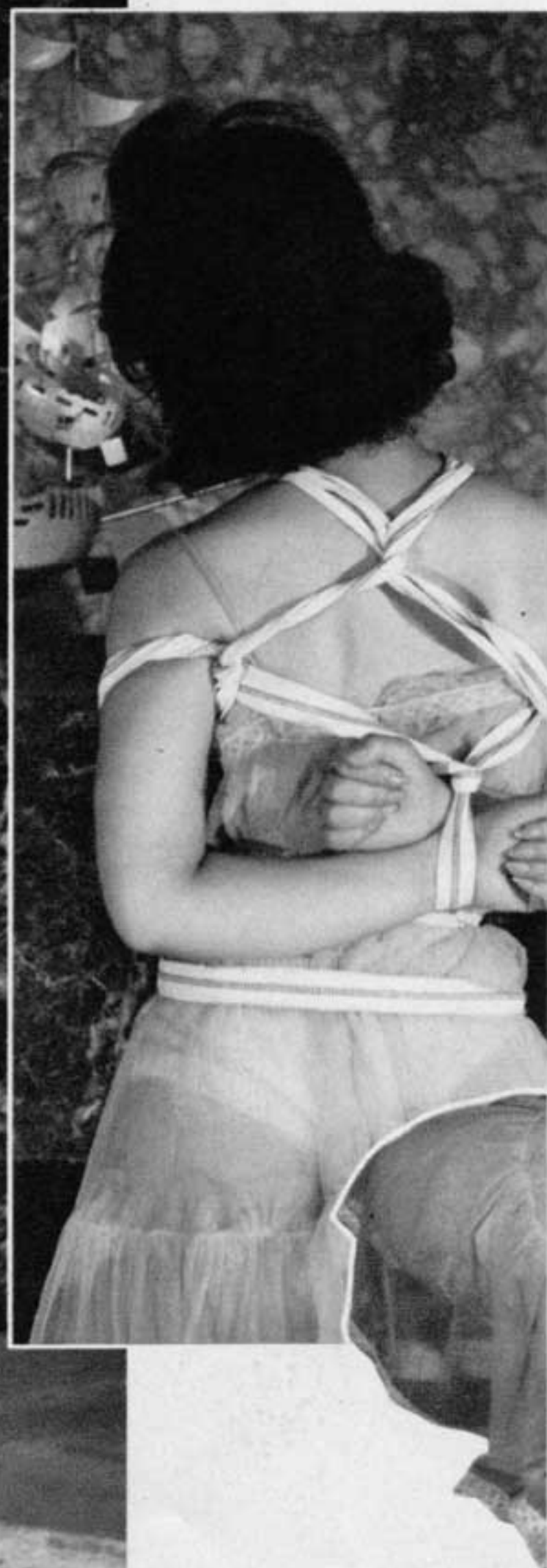
夜があけたばかりの庭には 人気はない だ
から ふだんは人通りの多いしおり戸の前で
ひとりの女が結かれていようと 知る人は誰
もない この静かな緊縛の境地で 女の肉
体のかなしさがうめき 音もなく燃える炎を
みつめて ひそかな陶醉を待ちこがれている

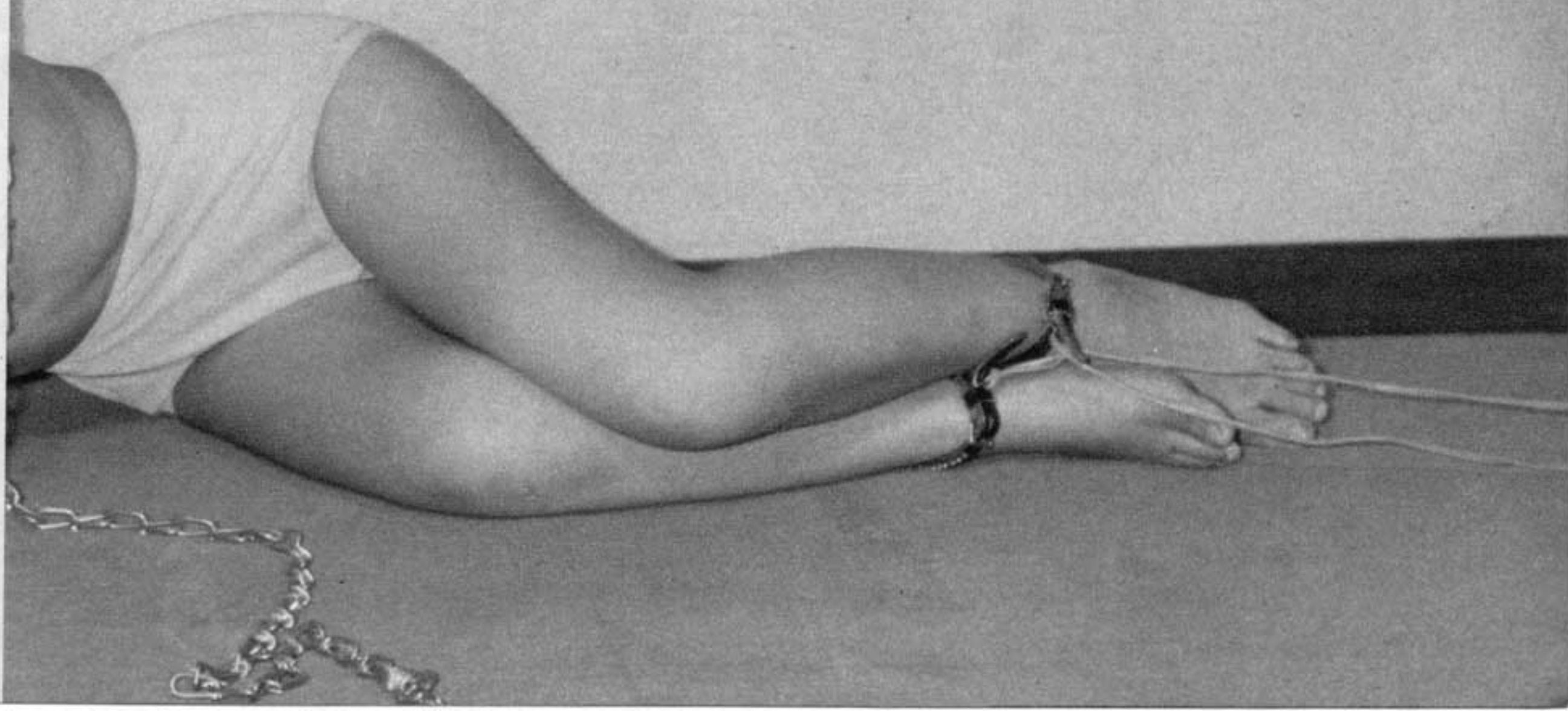


うしろ手の
ポーズ



うしろ手にぐっと縛られて その繩
が首に巻かれた 上半身の自由を奪
ったこの緊縛が 女に いつでも
あきらめを教え 抵抗を忘れさせる







ハダカの女人犬

首には皮製の首輪 それにクサリがつながれて 足首にも皮製のベルト それに綱がゆわかれて さて このパ
ンティー一枚の女は 飼いならされた犬という趣向なの
だろう おとなしくしていれば ごほうびにおむすびが
与えられるし 肌も撫でてもらえるというのであろうか



色どりのある緊縛

白い肌と 赤い長じゅばんと そ
して 灰色の縄と これはまた
はなやかにも美しい 縛りの絵巻



縛愁のひと

縄は 女のからだの奥に眠る情炎をかき
たて 静まっている官能をよびさます



女の生理のいたずらか　よろこびに對するレジスタンスか　とにかく女は　繩が肌を巻くと　ほのかな憂愁にとらわれる　こんこんと　泉のように湧きだすのは　嗜虐の思いか　それとも　残虐への郷愁か　ひっそりと孤独を噛みしめるこのひとときに　女のいのちを燃やし尽くしても悔いない心に　とらわれる宿命を負う



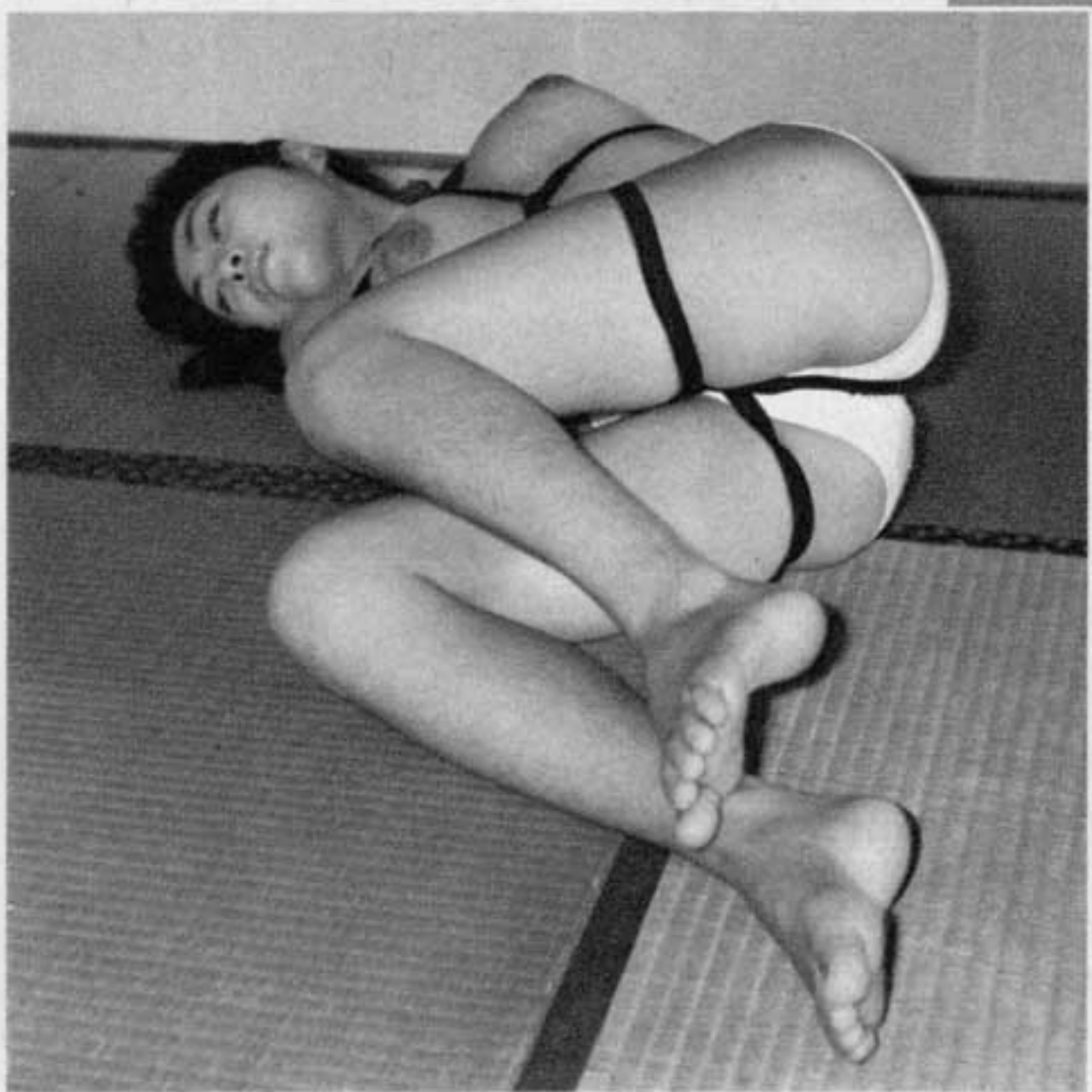




浴室の責め

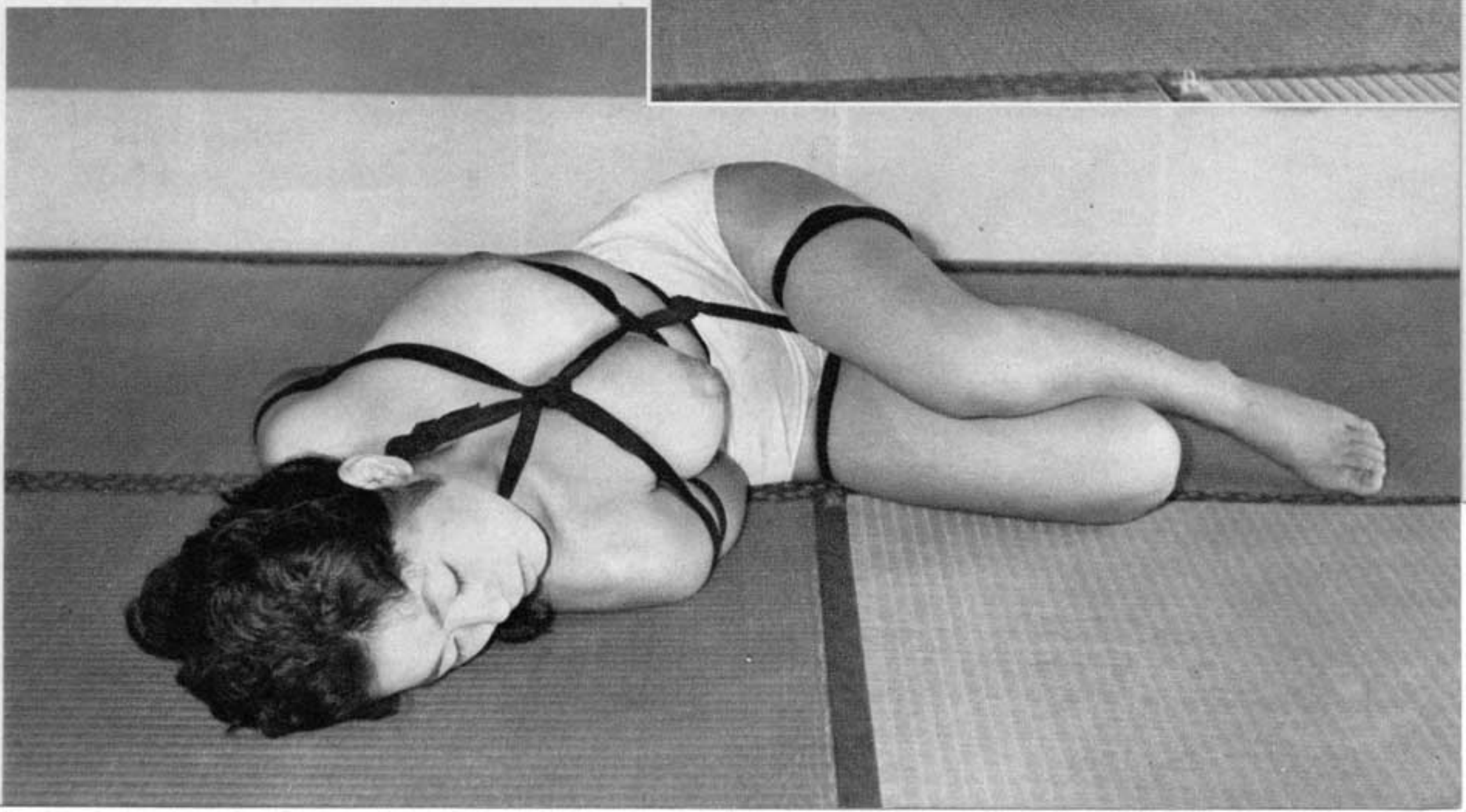
サルクツワは呼吸を困難にするが 湯に顔をつっこまれるのは もっと残酷に 息の根さえとめる





ゴムひも しばり

ゴムのひもは 軽くし
ばるだけでも 肌をし
めあげ 肉に食いこむ
その痛さをこらえると
き 緊縛のほんとうの
味が にじみ出てくる



はややかな縛虐

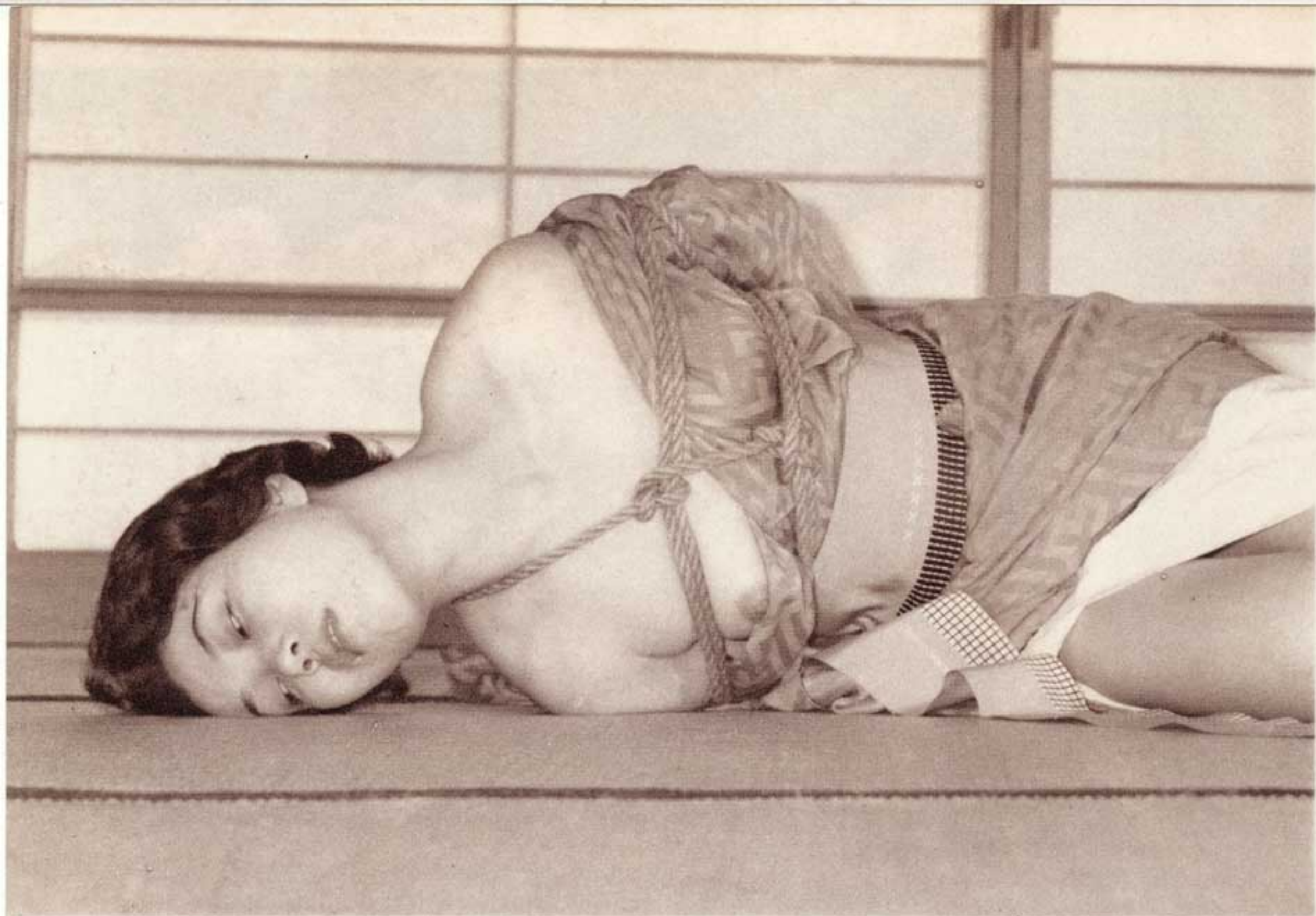


縄の目からはみ出した乳房、乱れた
衣装からこぼれた白い肌、この絵模
様から生まれでる、はややかな悦虐

受縛無残

花の乱れ散ったさまにも似て 美しく
かなしく 哀れな 緊縛の肢体



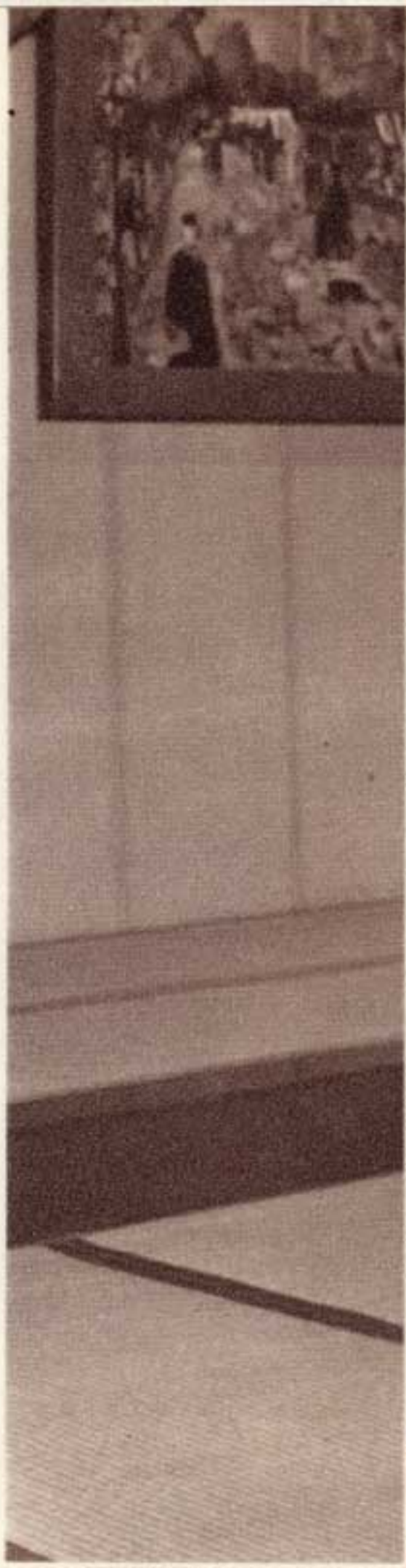




石橋のうえの座臥四態

ひとつところがれば水のなかに落ちるし ちよつとよろめ
ただけでも 水づけになる不安定な姿勢におかれて
女は なにを思い なにを考えているのだろうか 受縛
の姿態から湧然とにじみでる甘美な官能に身をひたしな
がら うつろな目にうつる空の色に 感覚を色あげし
陶醉のひとつきを 逃がすまいと 噛みしめている女よ





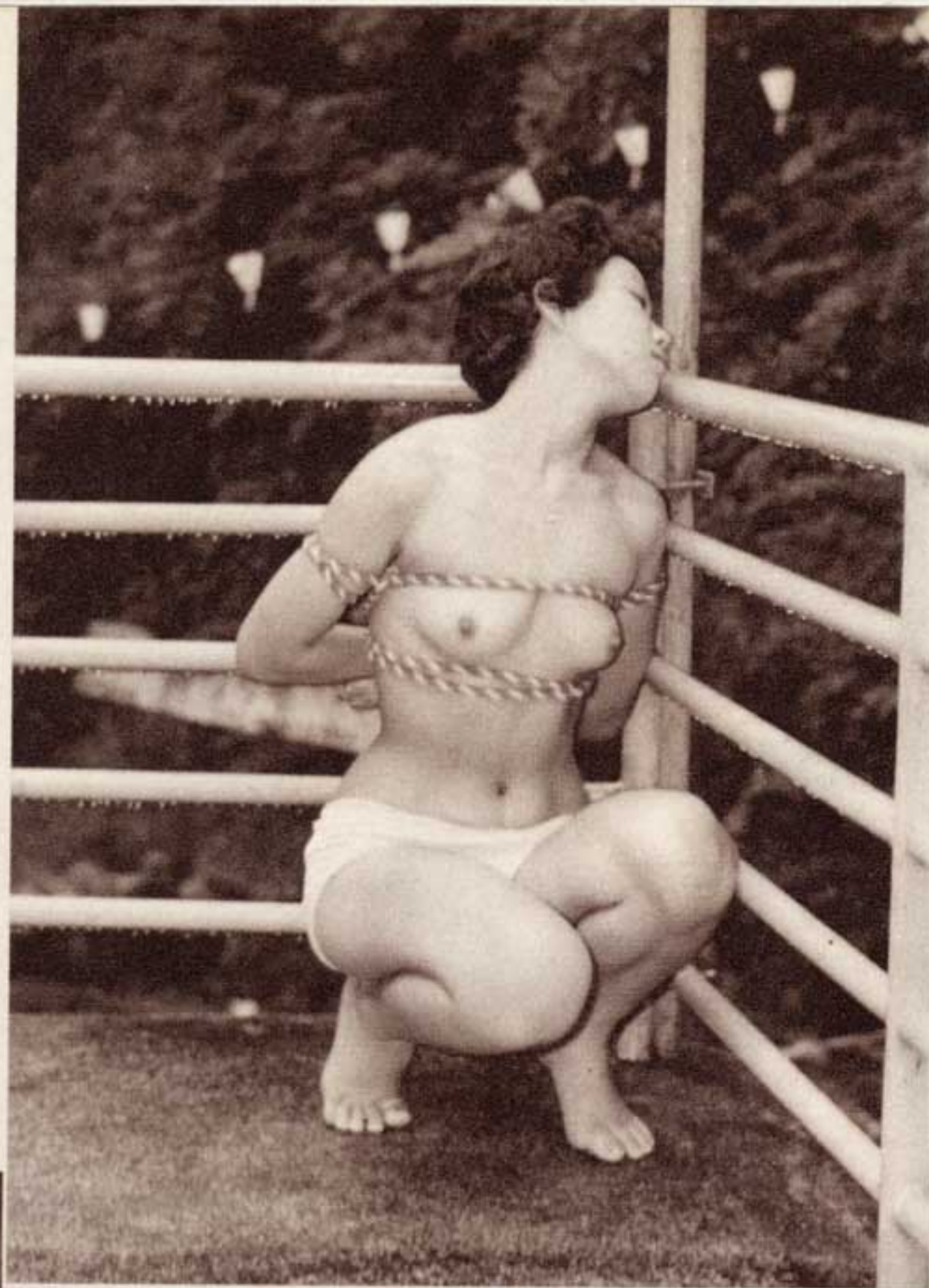
法悦の時は流れて

ここには苦痛がある ここには法悦がある そしてここには生まれ出る奇妙な感覚がある それが女のいのちだというひとがいる それが女の業だというひとがいる そういう時間が 静かな炎をたてて 音もなく流れる その人気のない部屋の この時間と空間を喪失した次元に ああ 女は ひたむきに官能を傾斜させている



露台の白魚

山を背景に この露台は 雨あがりの静謐を
たたえている まだ水滴のしたたるひととき
縛られてうずくまる女の肌が 白身の魚のよ
うに ときどきひらめく その白さは 受縛
のよろこびとかなしみをないあわせた感情の
ように なにか色のない手ざわりにかがやく





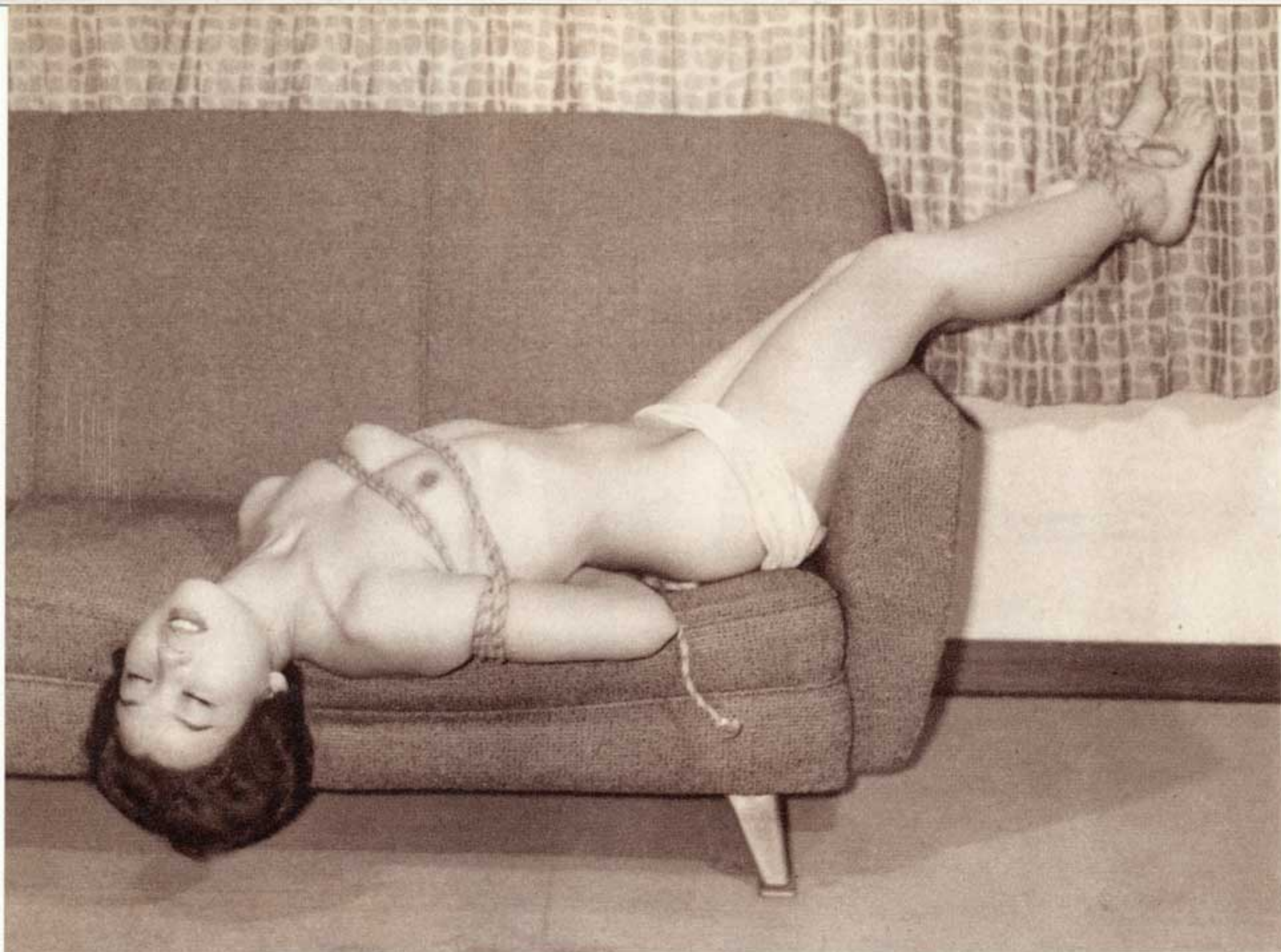


石と草のなかで

草がすがれ 石が散らかる庭で ひっそりと縛られた女 これは荒れ屋敷の妖精なのだろうか 白い肌がピラピラして 乳房と黒髪が 甘い吐息を 時にもらす







長椅子さかさ姿態

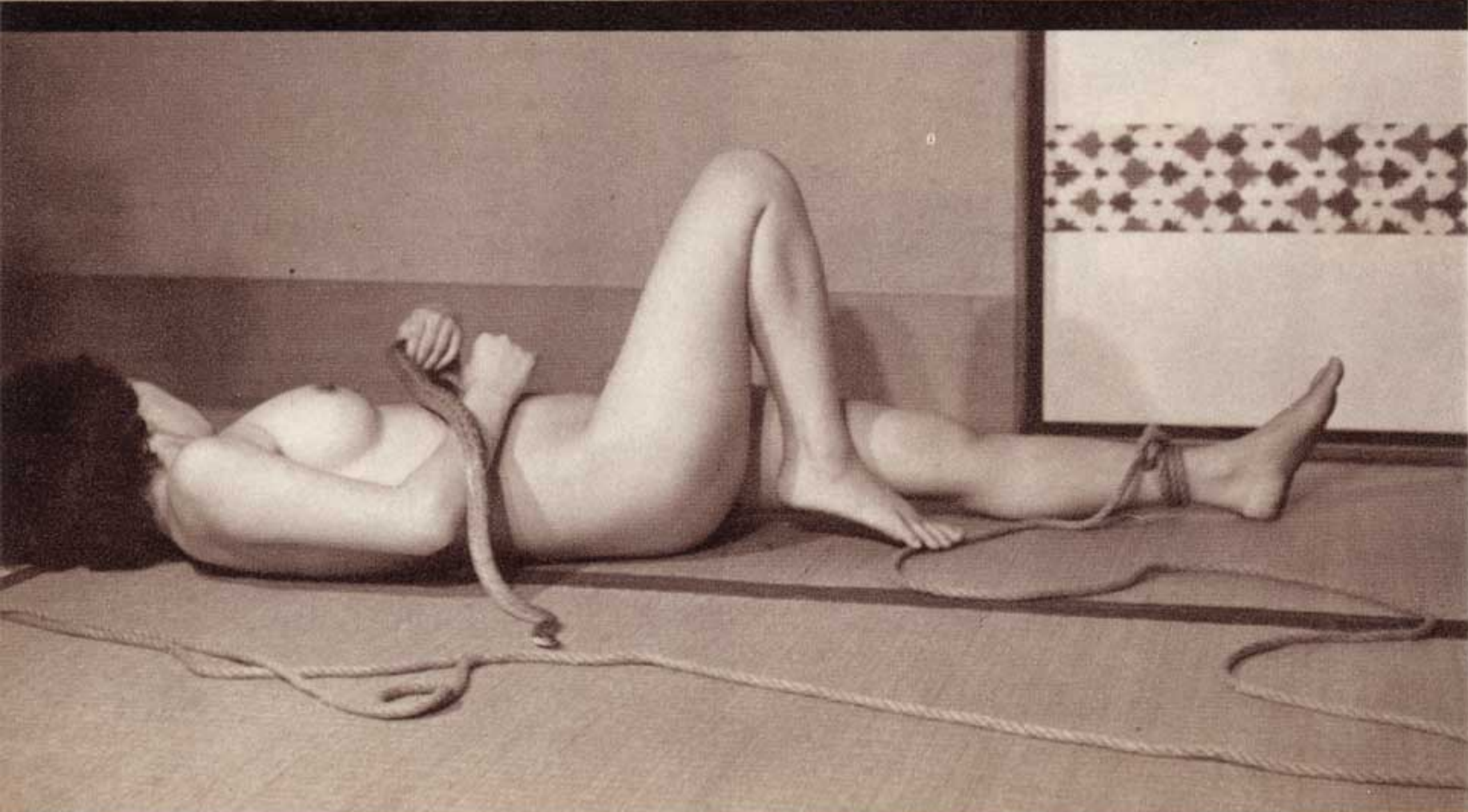
手首と足首をいっしょにしばられて放り出された姿勢
うしろ手で足首を結えられたポーズ どちらにしても
窮屈なことは変わらない しかもさかさにされて 血
が頭に下がり このままでいれば 失心の時が必ずく
る その失心直前の気持ちには 天国にのぼる思いがす
るし 桃源境をさまようようだというのだが さて？



はいまわるへび

へびは 女の肌を好み 女の肌は へびの冷たい感触を求める へびは 女の肉体をはいまわり 自分の安住の場所をさがし 女は へびをまといつかせ 歓喜の思いをかきたてようとする

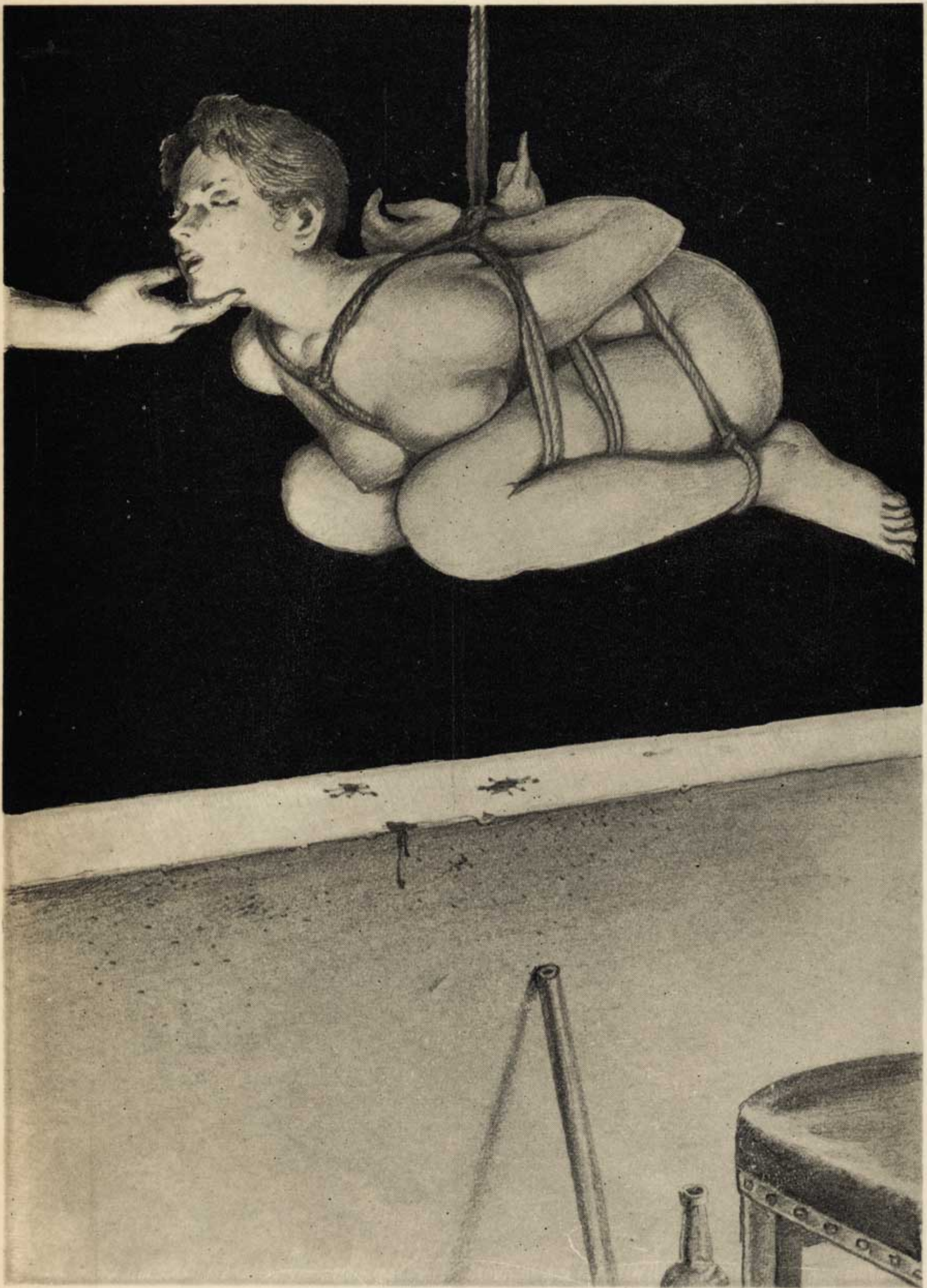




立縛三姿

空屋敷の庭で ひとり立つ 受縛の女 ただ
ひたすらに なにかを待っている なにかを





吊ってくすぐる——三つ折りに縛られた女は血を滴らせて苦しむ 土居啓子・え



ア
リ
責
め――裸体にむかれて縛りつけられて
からだのあちこちにミツを塗られて
ア리가ムズムズはい回る
土居啓子・え

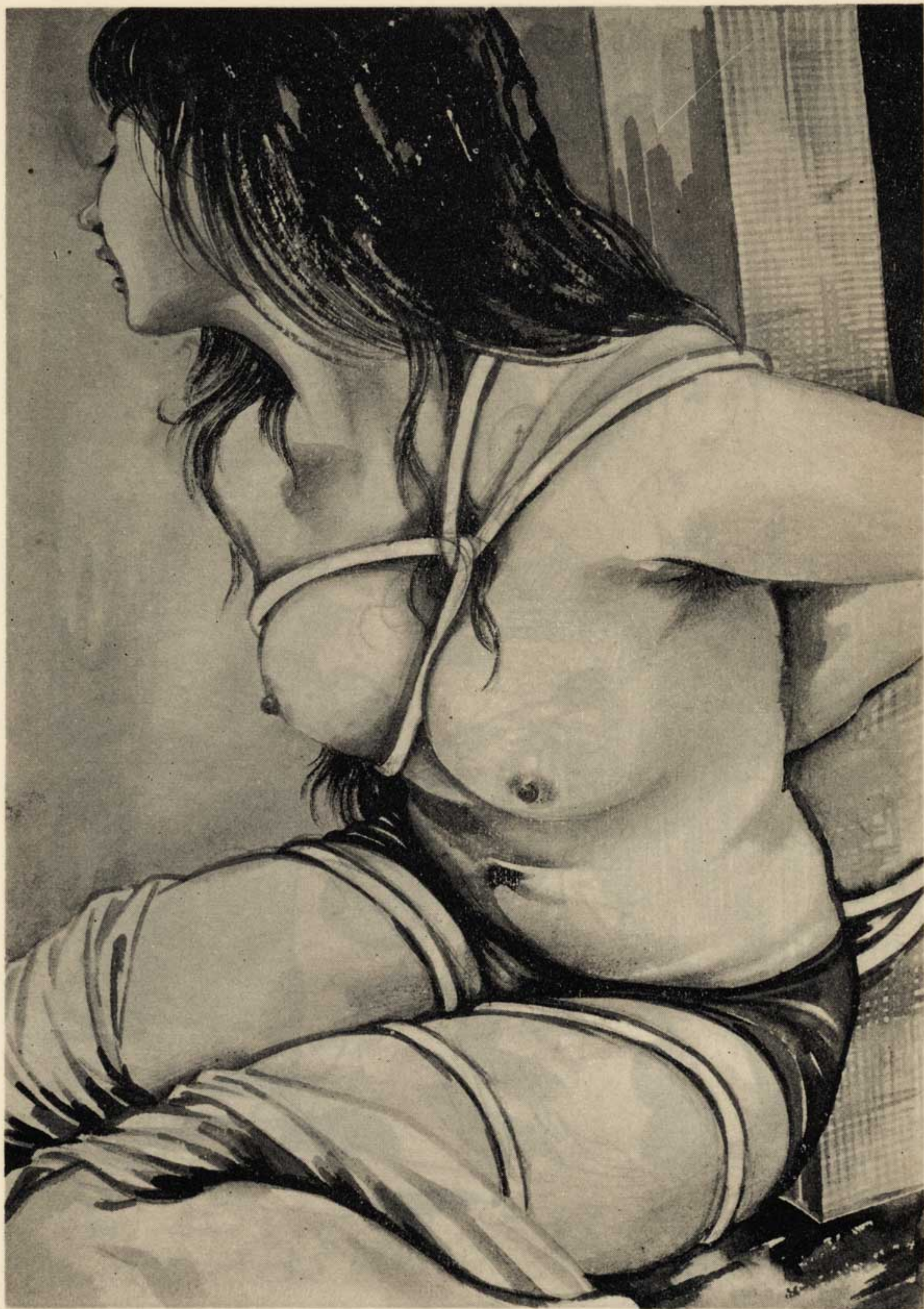




丸太流し——むかれた半裸の肌に水の冷たさがしみとおる 江馬美久・え



愛憎の果て——可愛さ余って憎さ百倍　くくりあげて一打ち　江馬美久・九



柱 し ば り——黒髪の乱れに 肌をしめる縄の疼痛が見える 田上恵子・え



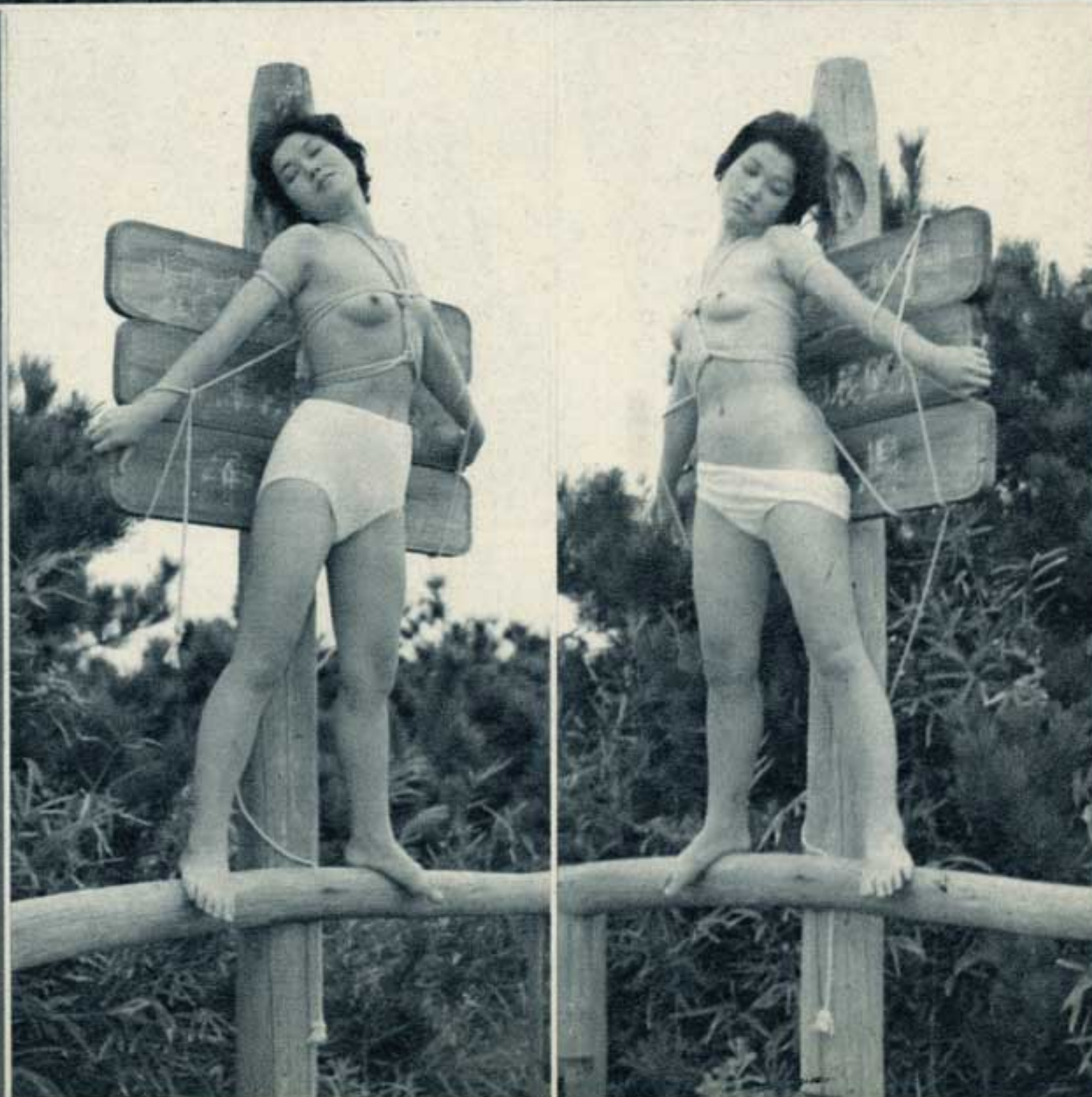
ムチのあと——縛られた女の肌にムチのあとが赤く血を噴く 田上恵子・え



肌を巻くベルト——グッとしめたベルトが 柔肌に模様をえがく 田上恵子・え

華麗なるハリツケ





山の公園の指示標にくくられた裸女の白
い肌に 薄ら日がちらつき 悦虐の時が
かすめる この中空のハリツケの なん
と華麗で 艶美な姿態か 若き裸女磔刑





受縛の表裏

うしろ手に結かれて 転が
されて そのオモテとウラ
の女の表情が ここにある



碁盤の上に

サーカスのゾウなら 碁盤のりという芸当がある
が 縛られた女が 碁盤の上にのせられるのは
芸当ではない 狭いスペースに 不自由な姿勢で
おかれていると からだの奥のほうから、おかし
な感覚が燃えひろがり それが感情をおおる 碁
盤の上で白石と黒石が入り乱れて勝負を争うよう
に 女のからだのなかを交錯した官能が走り回る







片手つり

片手をあげて シュロの木にくくられる
と シュロの幹が 柔肌にザラザラ痛い







残虐を運ぶ自動車

現代の寵児・自動車ではこぼれる 緊縛の
女体 はこぼれるうちに ハダカにむかれ
縄がキリキリと肌を噛む この残虐に耐え
る女の肉体には 不思議な生きものがすん
でいるのだろうか 悲鳴もあげず肌が輝く

ジョン
ウィリー
画集



若奥さまのお出掛け——クジラの骨をシンにした強いコルセットで締め上げるとき、女性はいよいよ苦しさのために暴れる。そこで柱につかまるのがふつうだが、ここでは、両手を上げて縛りつけられている。お出掛け前の一苦勞といったところ。



午前7時30分——「なによ、このウデタマゴは！ 食べられやしないわ」手の自由を奪う衣装を着せられて、仮面をはいた女の本性。



コルセットを締める——「キツチリと合わせ目をくっつけばいいのよ」とは言うものの、これは、女性にとって、一つの苦業だ。



(右) クレオパトラ——首カセと背中を通し棒、足クサリなど、すべては制約された範囲での動きを目的としている。

(左) アンドロメダ——ベルトの後側からのクサリで両手結束というのは珍しいアイデア。



午後1時——幅のひろいベルトと背面でつながっているブラウスを着た、お茶の服装。窮屈なところがネライだろう。

午後8時——同じく正装で、左と同様に背面での接続がついているロオブ



(左) 女主人——ガーターの飾りとウエストのくびれ，上半身の男性的衣装とムチがポイント。
(中) 人間クラッカー——キャバレーなどでやる小型花火を形どった夢の衣装，緊縛を兼ねる。
(右) ダイアナ——符りの女神。羽根帽子，皮の上着，ハイヒールの長靴など，実用的な衣装。



(右) フランスの給仕女。

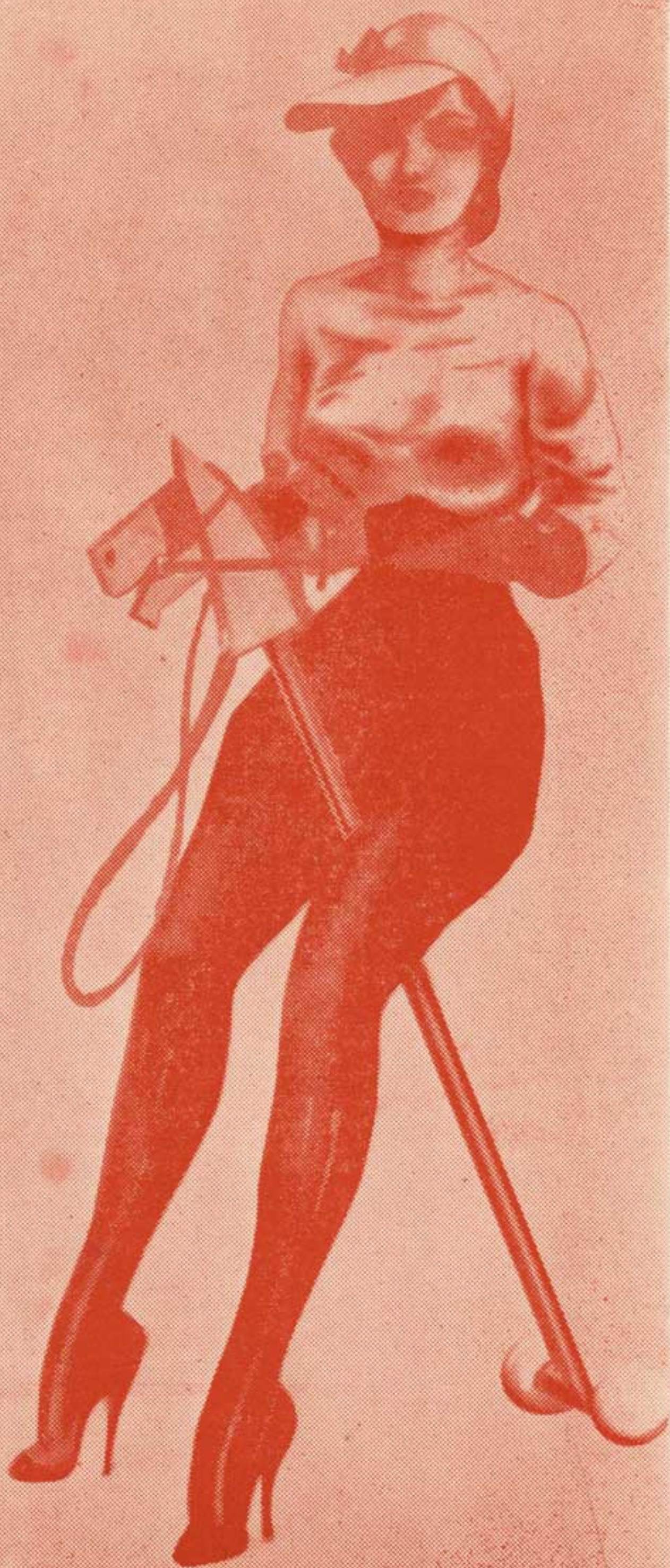
(左) ロンドン市の某医師の体験記に添えられたさしえ——このなかで、ロープやナワによる縛りでなく、全身を同時緊縛することに重点がおかれている。



(右) オフェリア

(左) 花の精

いずれも幻想的な衣装



(右) 騎 手

(左) 後宮の奴隷

いずれも幻想的な衣装

オエ・オエ・オエ——「この女は……」と罪状を読みあげながら、刑事は女をひき回す





皮とのひととき——皮のファンタジーともいうべき雰囲気ただよう

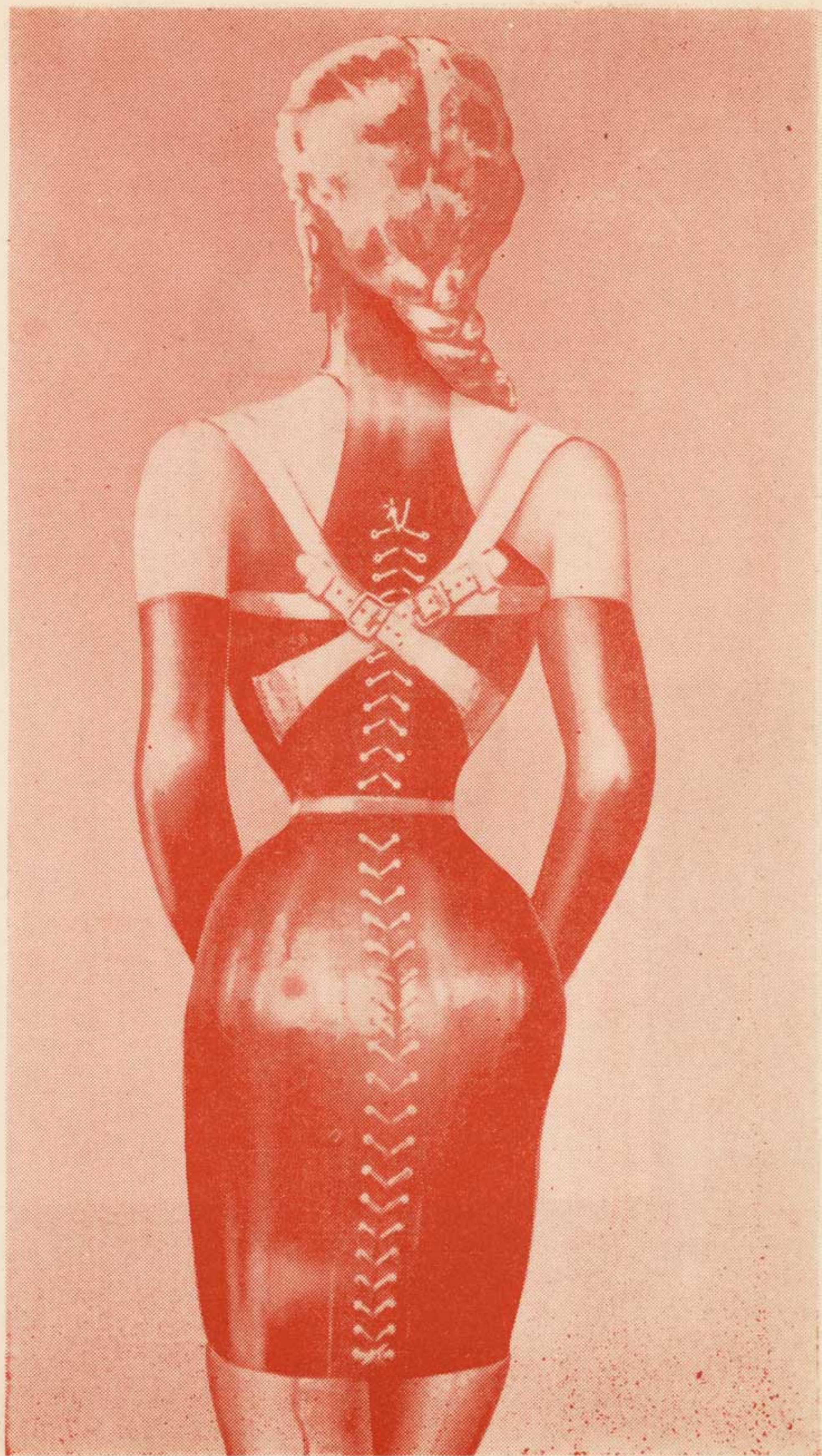
アブチックな写真集



こんな目にあわないように柔道をならいましょう——という連作写真のうちの1枚

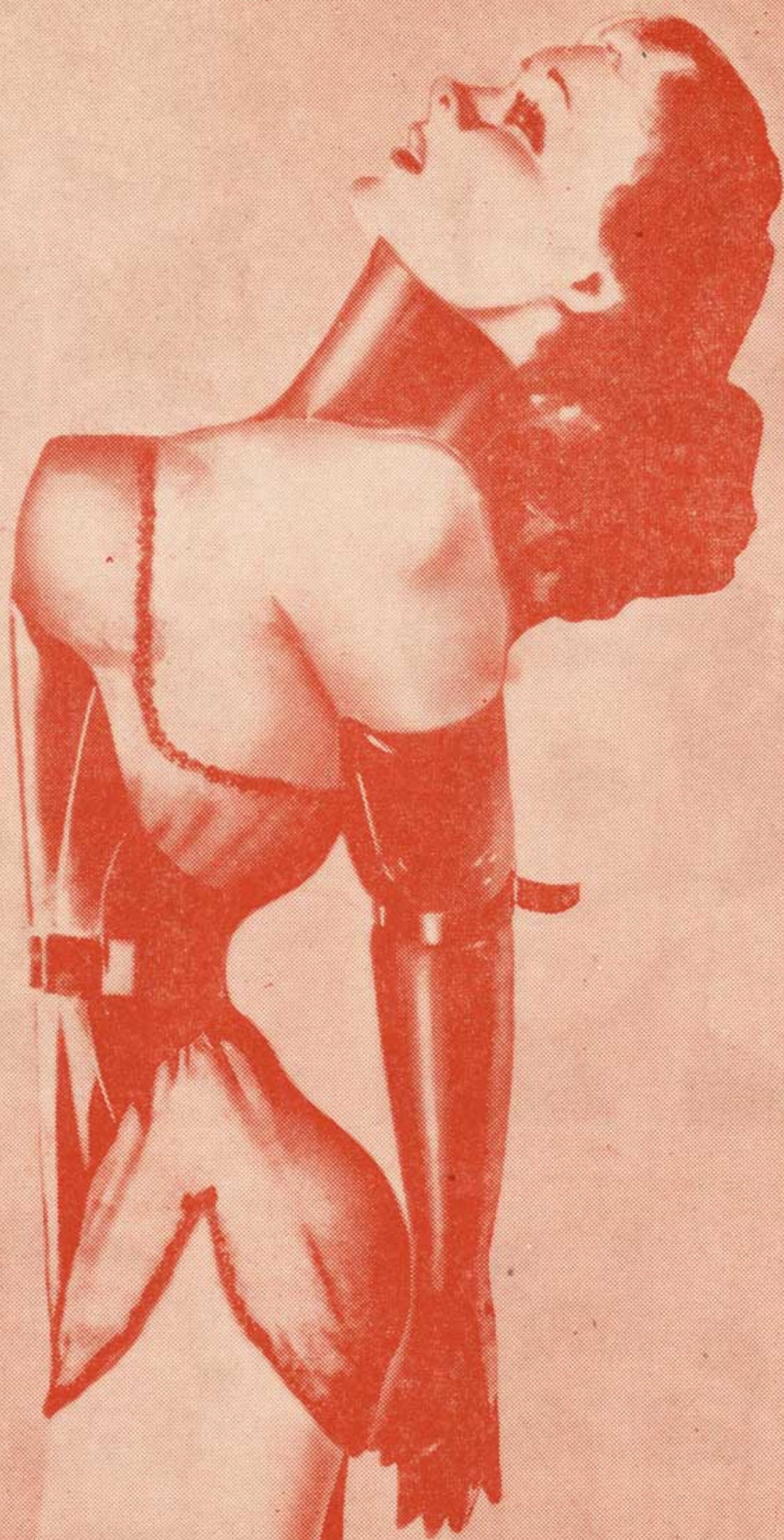


こんな目にあわないように柔道をならいましょう——シリーズ中の1枚



肩つり式身体訓練用コルセット

身体矯正器——良いくび、美しい手、豊かな胸、ウエストと、正しい姿勢をつくるための美容装置





嵌口具の諸形式——右上から下へ、完全防声型、犬型、ベアニイ型、左上から下へ
 パーリントン型、ノーチラス型で、馬勒型、犬型と馬勒型がとくにおもしろい

サリーの体験

——ムチ打ちで訓練された女のセックス

田宮久男

1

サリーは、二十歳。ある美容院で働いている美容師見習いである。牝鹿^{めじか}のようにキリッとした肢体の持ち主で、可憐な美貌で、皆から愛されている。

だが、サリーには、トムという青年実業家の恋人があったので、どんな誘惑にも見向きもしなかった。

ある日、二人は、郊外へドライブした。サリーの休みの日には、今までも、よく二人でドライブしたから、その日もサリーは楽しさに胸をおどらせていた。

ところが、とある森の入り口にさしかかたとき、トムが話しかけた。

「サリー、君はボクを愛しているね」

「もちろんだわ。どうして、いまさら、そん



なことをきくの？」

「いや、いいんだよ……じゃあ、ボクの言うことなら、なんでもきいてくれるかい？」

「ええ、いいわ」

「これからボクたちは、あるところへ行くんだが、そこでどんなことが起ころうが、なにも質問せず、ボクの言うとおりでできるって誓えるかい？」

「ええ、誓うわ」

「きつとだよ」

といているうちに、森の奥がひらけて、そこに一軒ポツンと建てられた別荘風の建物の前に着いた。

「さあ、下りよう……そして、さっきの誓いを忘れないでくれ」

サリーは、ちょっと不安な気になったが、トムを愛する気持ちが、それを打ち消させた。二人が玄関に立つと、長いガウンを羽織った女が出てきて、サリーに目かくしをして奥へ導いた。

目かくしをとられたところは、豪華な応接間風の部屋で、トムのほかに、見知らぬ男が三人いた。

そのなかのひとりが、サリーに命じた。

「その椅子に上半身をもたれさせて膝まづき





なさい」

彼女が、いわれたとおりの格好をすると、腕で椅子を抱かせて、椅子の座に、上半身をぐるぐる巻きに縛りつけてしまった。

そして、彼女のスカートを巻くりあげて、白く、むっちりとした二つの肉の丘をむき出しにした。というのは、サリーは、トムとデイトするときは、いつもパンティーをはかないことにしていたからだ。そのほうが、いつでも、トムの愛の手を導き入れるのに便利なところからの習慣だった。

こうしておいて、トムを加えた男たち四人は、手に手に思い思いのムチを持つと、かわるがわる、サリーのお尻を、ムチ打った。

思いもかけないことに、サリーが、泣きわめくと、トムは冷ややかな声で、

「サリー、さっきの誓いを忘れたのか」
ときめつけた。

だが、誓いは誓いとしても、この肉体的な痛苦は、思わずサリーの口から悲鳴をもらさせたのはやむをえない。そこで男たちは、サリーの口に、ハンカチでサルグツワをかませ、声をたてることさえ封じ込めた。

四人の男によるムチ打ちは、たっぷり二十分はつづいたろう。いつかサリーは、失心し

2

失心からさめたときサリーは、ベッドに寝かされていた。そばにはトムが、いつものやさしい微笑を浮かべて見守っていた。サリーは夢を見たのではないかと思った。

ていた。

だが、サリーは、夢を見たのではなかった。それからというもの、トムは、三日にあげずサリーを自分のアパートに連れて行っては、着ているものをすべて脱がせて、ムチ打つよ



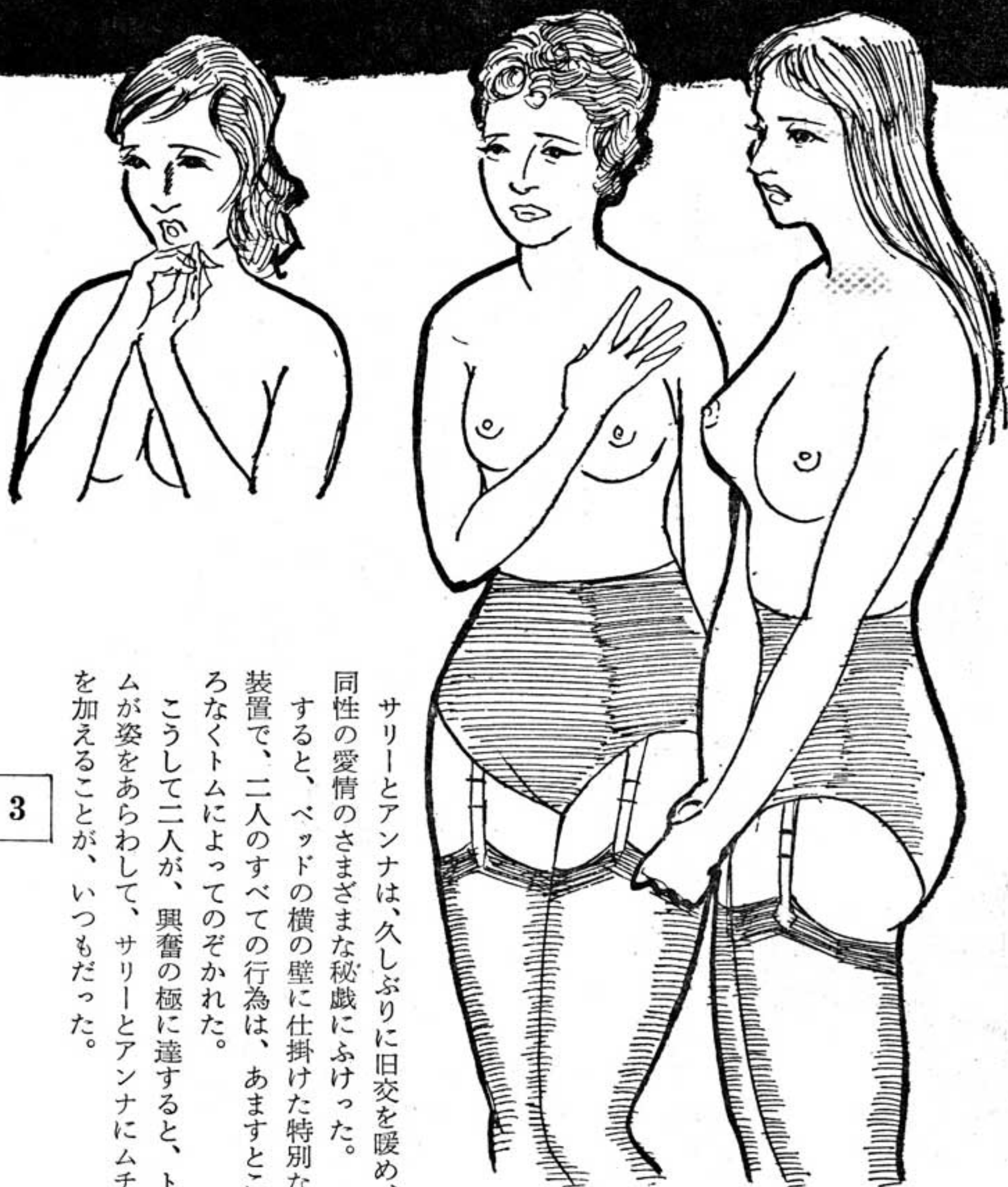
うになった。

やがてサリーも、トムにムチ打たれることの苦痛のなかに、奇妙な快感が湧きいでるのを感じるようになり、トムのムチを待つ日が多くなっていった。

そのころ、トムは、サリーの友だちのアンナをつれてきて、ベッドで、思いきり愛し合え、と言った。

アンナは、サリーがトムを知る前まで、いわばレスボスの相手をつとめた友だちだったのである。いつかサリーが、トムにそう話したことを、おぼえていたのだろう。





サリーとアンナは、久しぶりに旧交を暖め、同性の愛情のさまざまな秘戯にふけた。

すると、ベッドの横の壁に仕掛けた特別な装置で、二人のすべての行為は、あますところなくトムによってのぞかれた。

こうして二人が、興奮の極に達すると、トムが姿をあらわして、サリーとアンナにムチを加えることが、いつもだった。

3

ある日、トムがサリーに言った。

「サリー、君のボクに対する愛は永遠に変わらないかい」

「ええ、あたし、このごろ、純粋な愛情ってものについて考えるようになったの。どんなことでも、あなたを喜ばせることができるとしたら、あたしは、やるわ」

「そう。それじゃあ、キミのからだに、ボクのものだっていう印をつけてもいい？」

「ええ、どうぞ」

「では、きょう、いっしょに行ってくれるねえ？」

「どこへでも、あなたのいいように……」

二人は、出掛けた。そこもまた、サリーがはじめてムチ打ちを体験した森のなかの家のように、ひっそりとした屋敷だった。川に沿って広い庭のある、どっしりした大きな屋敷だった。

二人が通されたところは奥まった一室だった。妖艶な女主人が待っていた。

「ようこそ、準備は全部整っていますわ」

と、彼女はトムにいった。

「彼女は、この訓練が終わると、もっともっと魅力的になるわ」

そういって、手もとのベルを鳴らした。

すると、三人の美しい娘たちが、全裸のままであらわれた。彼女らは、すきとおるように薄い、黒のストッキングと、クジラの骨の



はいった黒い絹のコルセットをもってきた。
そしてサリーに、ストッキングをはかせ、コ
ルセットを、あらん限りの力をこめて、サリ
ーの息がつまるほど強く、しめ上げた。
そうしてから、フランス戸をあけて、次の

部屋へサリーを案内した。
そこは、正面に五センチほど高くなった舞
台があり、二メートルばかりの間隔をおいて
二本の円柱がドームを支えていた。舞台の上
には厚いじゅうたんが敷かれていた。

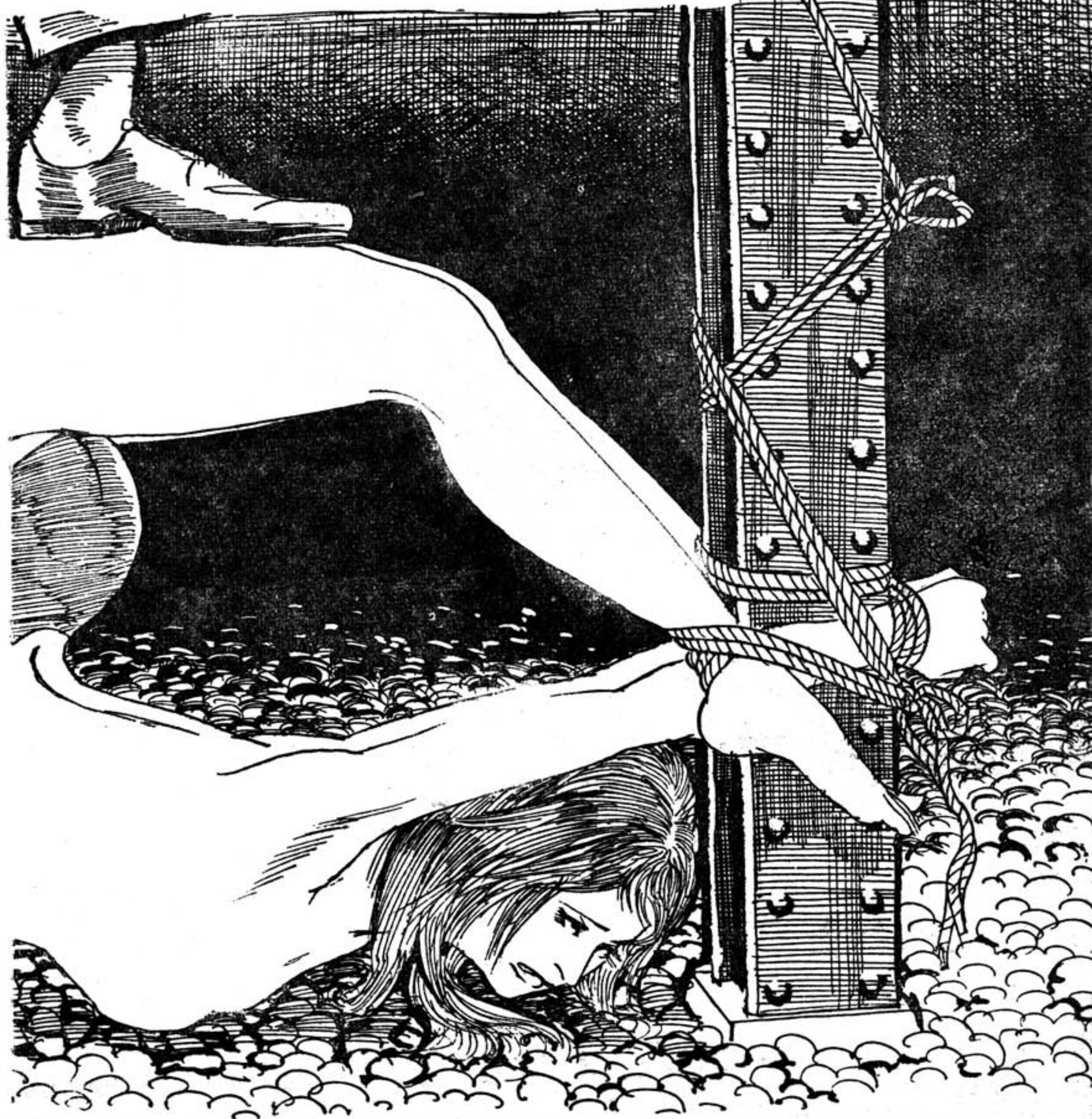
サリーは、その円柱の一本に、お腹がぴたりつくほど押しつけられ、腰と膝のところで、柱に巻きつけられた。次いで、両手首と両足首のところで柱に縛りつけられた。

不気味に静まりかえった部屋では、火のパチパチはじける音がし、やがて鉄が焼けるにおいが流れてきた。

女主人は、サリーの、白く、きめのこまかいお尻を静かに撫でていたが、美少女のひとりが差し出した焼きゴテをとると、それを、サッと、サリーのお尻に押しあてた。

突然、あらゆる苦痛をいっしょくたにしたような激痛が、サリーのからだを突き抜けた。サリーは、全身の筋肉をこわばらせて、あらんかぎりの悲鳴をあげた。

ワン、ツウ、スリー……と、ゆっくり数える声が、ファイブと告げたとき、サリーは気絶してしまった。こうしてサリーは、トムの



頭文字であるTという字を、両方のお尻に、深々と焼きこまれたのである。

4

肉を焼いた傷も、サリーの若さは、数日で回復させた。そのあいだ彼女は、女主人と三人の美少女によって、手厚くもてなされていたのである。

傷のなおった日、トムがまた訪ねてきた。サリーは、今度は戸外に連れて行かれた。そして小石のゴロゴロしているところについて伏せに寝かされた。その両手は、側の鉄柱についているクサリにしっかりと固定された。そして両足は、ぐっとうしろにひっぱられ、そのまま、くるぶしを腕のところのクサリにいっしょに縛りつけられた。

この屋敷の女主人の声が聞こえた。

「ここが一番柔らかなところだよ。だから、傷をつけないようにムチを当てなければ……」片足をサリーの腰にのせたトムの手のムチが、その、むき出しの個所へ打ち下ろされた。サリーは苦しさにうめいた。彼女は、皮膚を破り、モモに血をしたたらせるムチ音のなかで、遠くなる意識のうちに、「女の幸福をつかんだと考えていた。」



次郎

三ノ宮からトリア・ロードのだらだら坂を上りかける。真夜中の一時三〇分。青い速達便のポストの前でタバコに火をつける。やがて大型のクライスラーが六甲方面からフル・スピードで降りて来た。

△1▽



マミの正体

——ある変態クラブの女の性向——

三 村



車は私の前で止まった。チャイナ服の女がサンングラスをかけて運転していた。

私はマッチに刷り込んだ黒いスペードの割符わりふを女に渡した。女のもったスピードとピッタリ合致すると女はドアをあけた。

「あなた、マミをご存知？」

阪神国道線に入った車は、軽く九〇キロを走った。女の口からマミの話が出た。私が黒いスペードの割符を買ったのは東京のクラブ・サボイアで、ホステスのマミからである。私が神戸に出張すると知って、マミが、その肉体とともに三万円で売りつけたものだ。

「マミがあなたを待ってるわ」

夙川しゅくがわを過ぎ、住宅地に入った。

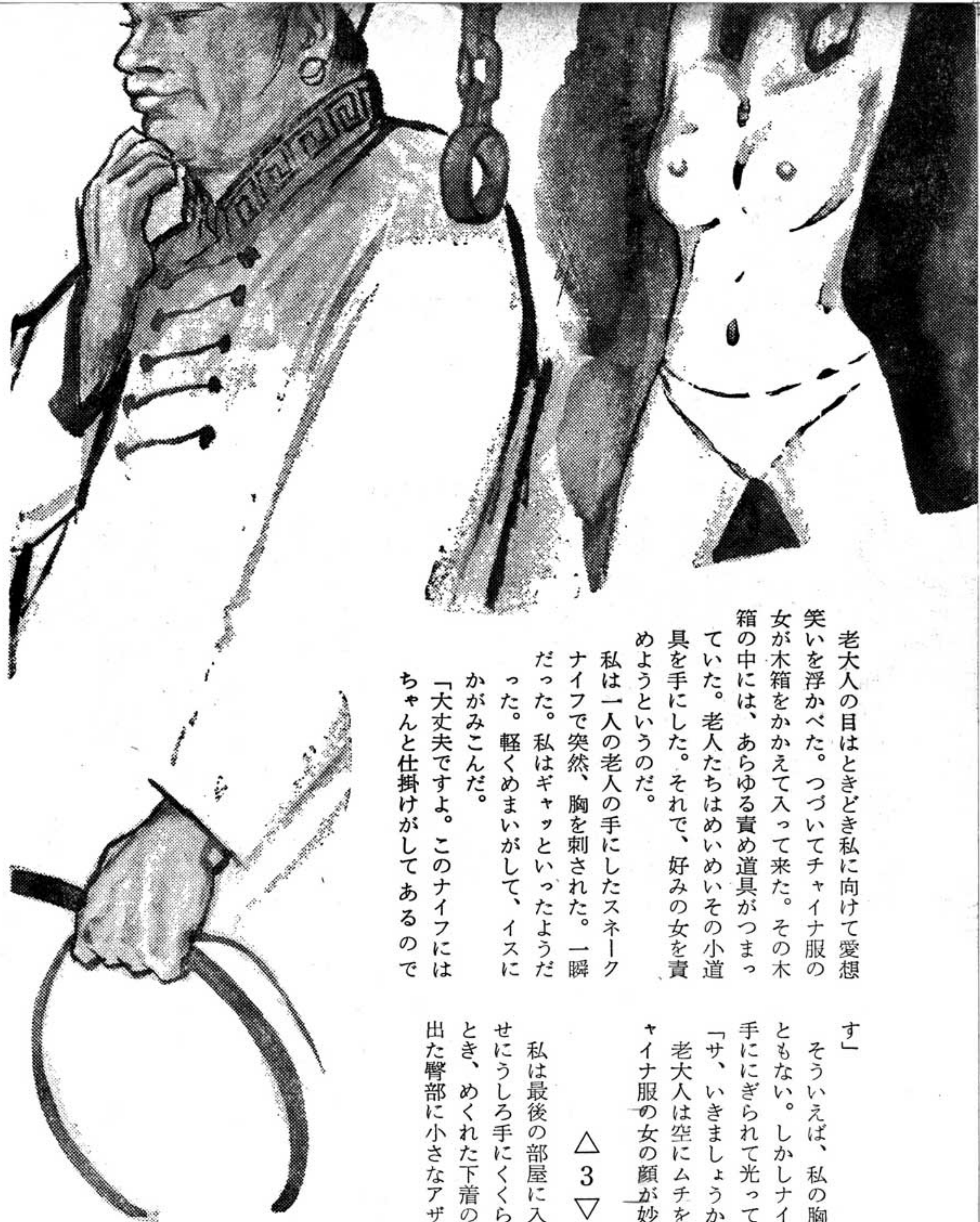
△2▽

表向きは豪壮な和風の家だが、ガレージに入っからは、抜け道のようなドアがあき、狭い階段を降りると、美しい中国風の建物があった。

私のほかに男が三人、いずれも肥満した豚のように無為な老人ばかりが、テーブルをかこんでスコッチをあけていた。

やがて一人の中国人が、手にムチをもって入ってきた。赤ん坊のようなヨチヨチ歩きをする老人ラオタイレンだ。

顔見知りのせいか、私をのぞいた三人の老人たちは、その老大人と親しく話し込んでいた。



老人の目はときどき私に向けて愛想笑いを浮かべた。つづいてチャイナ服の女が木箱をかかえて入って来た。その木箱の中には、あらゆる責め道具がつまっていた。老人たちはめいめいその小道具を手にした。それで、好みの女を責めようというのだ。

私は一人の老人の手にしたスネークナイフで突然、胸を刺された。一瞬だった。私はギャツといったようだった。軽くめまいがして、イスにかがみこんだ。

「大丈夫ですよ。このナイフにはちゃんと仕掛けがしてあるので

す」

そういえば、私の胸には血も、刺されたあともない。しかしナイフは相変わらず老人の手ににぎられて光っていた。

「サ、いきましょか」

老人は空にムチをふった。その合図でチャイナ服の女の顔が妙にひきつった。

△ 3 ▽

私は最後の部屋に入った。ベッドにうつぶせにうしろ手にくくられた下着姿の女をみたとき、めくれた下着の下にあらわに白くうき出た臀部に小さなアザのあるのに気がついた。

「マミじゃないか」

私は東京でマミと一夜を過ごしたとき、なんとなくマミの臀にある青い小さなアザをほほえましく思った。

臀の青味もとれないくせに、そんな言葉のぴったりするあどけない女だったが



—。

私は出張先の神戸
でマミに会えるとは思
わなかった。

「わけを聞かない
で。早くあたしを
死ぬほどこいじめ
てッ」

マミは、サ
イドテーブル
に置かれたム
チに目を落
とした。
「あなたが
いじめな
ければ、
あたしは
あの豚

に殺されるの。さあ、思い切りうんとそのム
チであたしを苦しめて、そしてあたしを叫ば
せてッ」

私は手にしたムチを床にふるった。まとも
に、マミのからだにはとても打ちおろせるも
のではない。

「どうしたの、いけないわ。あの男はドアに
耳をあてて聞いているのよ」

「マミは声だけをあげればいいじゃないか」
仰向けになったマミのからだはすでに汗で
ぬれ、くねらせてムチをせがんだ。

私は、聞きわけのないマミに思わずムチを
ふるった。ピシッ、小気味のよい音を立てて
ムチがマミの腹に吸いついた。

「クーウッ」

必殺にひとしい私のムチに、マミはベッド
にとびあがった。火のような目を私に向け、
哀願する。

「わからずやッ」

「……………」

マミの腰にまきついたムチが下着を引き裂
いていた。

「マミ、どうした？」

歯をくいしばったマミの唇は切れて、血が
にじみ、ヒクヒクと乳房がひきつる。

マミ！ 二、三度からだをゆすったが、目を見開いたままぐったりと顔を伏せてしまった。私は直感的にマミの死を知り、部屋をとび出した。

△4▽

「どこへゆくね」

走りかけた廊下の途中で私は、むんずと右腕を老大人にとられた。

「マミが、マミが死んだ」

「ヒヒ……死なない、いい夢みてるよ」

老大人の頭から耳にかけて血がこびりついていて。

私が強引にひっぱるので、老大人もしぶしぶ部屋に入った。

マミは依然としてベッドに仰向けに横たわり、呼吸さえ止まっている様子。

「これ、死んでないよ」

老大人は下着をめくりあげると、のぞき込みながら言った。

「死んでない？」

「みるか？」

老大人はもう一度下着をめくった。

私は老大人

人が示す生のあかしを

知る気にな

らなかった。

「だいじょ

うぶよ」

やにわに

老大人はムチ

をふり上げて、マミ

の臀部を発止と打った。

「おうーっ」

けだものに似たマミのうめき声

がベッドをきしました。

「O・K？」

老大人はふくふくと笑った。

「あとで、あたし、マミに、ひどい目に

あうのよ」

軽くマミの頬に接吻すると、老大人は例の

ヨチヨチ歩きで出て行った。

マミの血にまみれた唇が、そのとき、やっ

と開いた。

「ひどいことをする人だね」

「フフフ……マミが嫌いになった？」

私はマミをうしろ手にくくったままひきよ



せて接

吻した。不

思議な情感がこ

み上がってくる。

「あの白豚の奴、ひどい目に

あわしてやる」

マミのからだが生気を帯びて立ち

上がった。

「両手をほどいて」



私はマミのからだを追った。

△ 5 ▽

「パイ豚ッ
出ておい
で」

私を従えてさっそうとしたマミが、狭い廊下で大きくムチをふった。チャイナ服の女が美しくみがき上げられた長靴をもって来てマミにはかせた。拍車もついている。

雄大な山脈を思わせる老大人が、なんと小豚のように小さく、ころころと這い出た。「お前はあたしをみたねッ、こうしてやる」長靴に顔をねじられ、鋭い拍車で首を切られた老大人が口から血泡を吹いた。

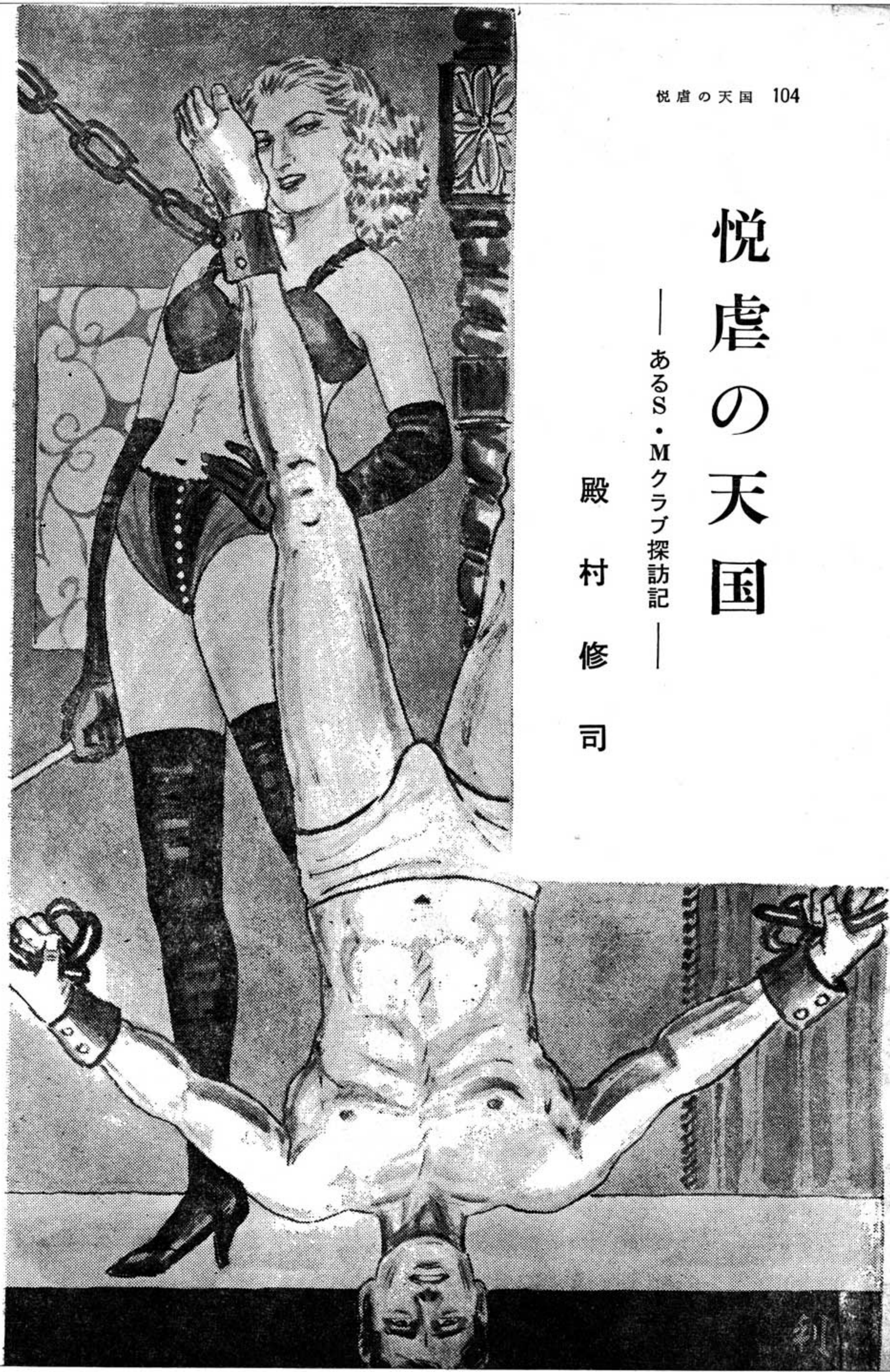
「豚、死んでしまえッ」

ムチが私の耳をかすめて宙を切った。

悦虐の天国

— あるS・Mクラブ探訪記 —

殿村修司



1

天井から、さかさ大の字に吊り下げられた若い男。その男の肌に、ピシリッ、ピシリッと皮のムチが鳴る。

男は、足首と手首に、がっしりと鉄環をかまされ、その鉄環にクサリがついていて、そのクサリが天井に固定されている。

女は、モモまである皮の長靴、それもピツタリ皮膚にすいつくほどのをはいて、半裸の姿で、ムチをふるっている。なかなかの美貌だが、その美貌が冷たく凍りついた感じで、酷薄冷淡な雰囲気をただよわせている。

女の手が、空中に、魚の遊泳に似てヒラヒラとひらめくと、鋭いムチ音が、ピシッ！と空気をつん裂いて、さかさ吊りの男の肌に鳴る。それは、音のない世界から生まれ出る爆発音のようなひびきで、男のからだを中心に、部屋じゅうに波紋をひろげていく。

「ウーム」

男は、その苦痛に耐えてうめくが、その顔から、からだ全体で、なんともいえない一種の陶酔の表情をあらわしている。頭に血が下りてきたのか、顔はまっ赤に充血して、目には恍惚の光を宿している。

かと思うと、部屋のもう一方の隅では若い女が、乳房だけを丸く露出させる奇妙な皮のブラジャーを装着され、片足をのばし、片足を思い切り曲げて腹に抱き込んだ不自由な姿でうずくまっているのだ。しかも、両手はぐっとうしろにねじ上げられて、やはり皮製の腕カセとでいうもので固定されている。その腕カセを止めたヒモに鉄の輪カギをひっかけて、これまた、天井に吊るされているではないか。

のびた女の片足のモモのつけ根の近くに、うずくまった男が、イレズミをしている。

苦痛にうごめく女と、その女を吊り上げる男と、女のモモにイレズミする男とのこのトリオは、これまた、混然として一種の雰囲気をつくり出し、それが法悦の放射能さえ放っている感じだ。

2

この部屋は、いったい、なんなのだろうか？

——拷問部屋か？

——ちがう。



——リンチの処刑場か？

——いな。

——地獄のモデルか？

——ノー、である。

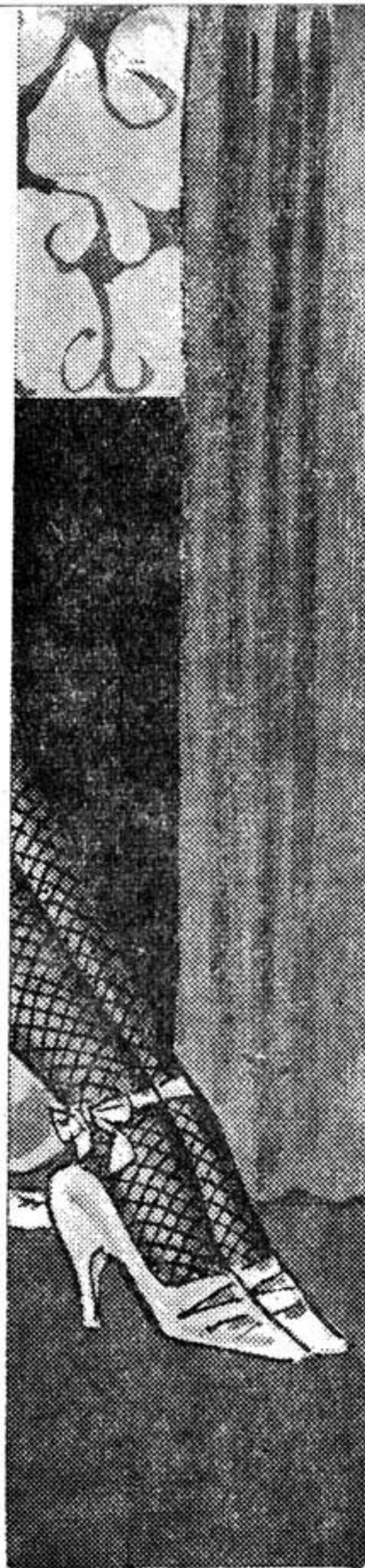
ここは、“あるクラブ”の一室なのだ。そう、“そういった趣味”つまり、SとMの性向者たちの集まるクラブなのだ。

そういえば、この建物自体が、ちょっと変わった雰囲気をもっている。

東京から、自動車で一時間ちょっと、小高い丘陵のふもとの、小さな林のなかの一軒家である。常緑樹のみどりをもれてチラチラする赤い屋根が、どこか怪奇なおもかげを見せている。

建物全体は、灰色にくすんで、木々のあいだに沈んだ感じで、ただ屋根の色だけが、血の赤さに無気味に光っている。

玄関のポーチに近く、幾台もの高級車がパ



ークしていて、ま新しい外車の尾部が、ピンと、サソリの尾のようにはねあがっているのも、まじっている。

このクラブは、外人六分、日本人四分の、S・Mクラブなのだ。そして、きょうは、その例会——つまり、プレイを楽しむ日なのだ。



玄関をはいったとつぎのホールは、長椅子やひじ掛け椅子やテーブルが、適当に配置されて、そここにわかれて、その話を語り合えるのだ。

そして、階下も階上も、廊下をはさんでいくつか並んでいる部屋は、それぞれに変わった趣向がこらされている。

ある部屋には、天井に鉄環が装置されていて、それからクサリが吊り下げられていて、壁には、手カセ、足カセ、クサリのたぐいが用意されているし、別の部屋には、鉄製の木馬（？）、ギロチン台のような責め道具が置いてある。各部屋ごとに、趣向をかえた責めのための用具が、工夫をこらして備えられているのだ。

会員たちは、だから、自分の好みの部屋で思いのままにプレイするのに、不自由はしない仕掛けなのだ。

ある部屋では、横棧にまたがせた女を柱に固定し、その顔を水にひたして、その呼吸困難な状態を楽しんでいるSの男がいるかと思うと、別の部屋では、女が二人がかりで一人の男をいたぶっている。男にくび輪をはめてそれをクサリでつなぎ、手首にはめた鉄環には鉄の玉をつけて自由を奪って転がし、一人

の女は、その上にでんと腰を下ろしてニタニタしている。

もう一人の女は、首につながれたクサリを思いきりひっぱって男に苦痛を与えている。

〈3〉

別の部屋をのぞいてみよう。

そこでも、吊り責めの最中だ。

鼻輪づり——これだけでも苦しいところへもってきて、両足を思いきり開かせて、それぞれ天井に吊り上げている。しかも、一方の足首は、手首をいっしょにしていくられていたのだから、ほんの少し身動きしても、全身の重量が、足首や鼻の頭にかかってくるというわけになる。

この酷苦のなかにいて、それでも女は、必死に苦痛に耐え、吊り上げたクサリに体重を託している。

その白い肌は、ほのかに赤みを帯びて興奮に息づいていて、それが、からだをよじるたびに、なまめかしく躍動している。

その肌に、男のムチが、容赦なく、ふり下ろされる。

ピシリッ!

男の手がひらめくと、ムチが、女の肌のい

たるところに、ふり下ろされる。

首すじ、腕、背中、モモ、ところきらわすムチが乱舞する。

そのたびに、女の口から、疼痛を噛みしめるうめきもれる。

だが、そのくらいでムチ打ちがやめられるはずはない。

そばの椅子にかけたヒゲをたくわえた男がどうやらこのシーンの演出家らしい。ウィスキーの角瓶を片手に、チビリチビリと強い酒をなめながら、若い男に、ムチをふり下ろす個所を指示している。

そのことばに従って若い男はムチをふるうのだが、

「よし、それでは、とどめの一打!」





とヒゲの男が指示すると、若い男は、手にしたムチを、女の、もっとも鋭敏な感覚をもっている個所、そして、一番やわらかで大事なところをめがけて、あやまたず、打ち下ろした。

この急所への、一打は、まことに見事に決まった。

ウッ！ と絶鳴して女は失心した。男たちの面上には、緊張のとける色が流れた

△4▽

人間馬は、こういったクラブでは、必ずといっていいくらい行なわれるプレイだ。



だが、ここで見られるそれは、ハミにしろアブミにしろ、精密な工夫がこらされ、精巧な細工がほどこされていた。

ハミは、乗馬者たる女性の手綱さばきによって、馬となった男の口をさき、アブミには鋭くとぎすまされた刃が取りつけられていて乗馬者の足さばきひとつで、馬の肌を切り、血を流させる。

鮮烈な血に色どられてこそ、人間馬のプレイは、クライマックスをよぶのだが――。

メカニックに演出され、演技を行なうこのクラブこそ、S・Mたちにとっては、桃源境なのではあるまいか。

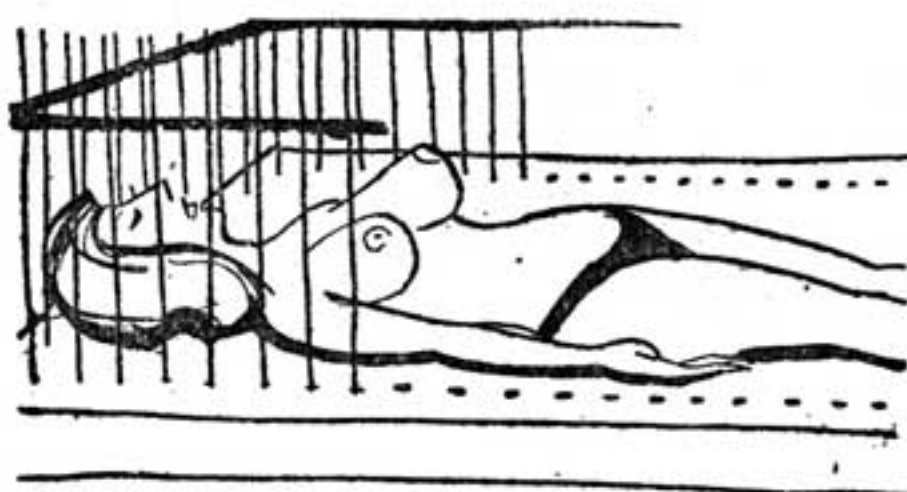
の

者

読

場の

広



▼村上ユキ様 毎号あなたの嗜虐への緊縛フォトを心待ちにしているファンの一人です。

画報第5集の柱を背負わされたのあなたの憂愁にみちみちた表情は、ひごろからあなたのファンの一人として期待しているだけに、心うつ緊縛美でした。

苦痛に身もだえし、悦虐の陶醉にひたる表情もたしかに緊縛美の一つでしょうが、毎号、あなたの表情のどこかに、必ずといってよいくらい、ものうい悲しみのあふれる美しさがにじみ出ています。

もし許されるならば「風奇」の編集者とご相談のうえ、つぎのような緊縛フォトを誌上にのせてください。

①大陸の烈日花——これは敗戦直後の北満を舞台にとり、暴虐なソ連兵の魔手からのがれるために集団自決する看護婦の一人として美しくも悲惨な最期を表わしていただきたいと思います。すでに幾人かは青酸カリで自決したが、残されたあなたには青酸カリがない。外科用のメスのみが残されている。すでに屋外にはソ連兵のため

く声が近づく。あなたは端然として死を決する。白衣を身にまとい、苦痛に身もだえして、あられもない姿にならぬように両ヒザをしっかりと縛り、静かに呼吸をととのえ、メスをみつめる。

このときのあなたの死への決意を、あなたのゆたかな表情でぜひ実現させていただきたいと思ひます。(津市・蔭山)

▼画報④⑤の両号にわたって、マルキ・ド・サドの「悪徳の栄え」を大変興味深く拝読しました。幸い発禁直前に買い求めていますので、前後編ともゆくりとサディズムの極致ともいふべき物語を読むことができ、絵をおかきになっていただいた田上氏には、深く感謝いたします。

つきましては、発表についての制約も種々ございましょうが近い将来に、もう一度、「決定版・悪徳の栄え」を、田上氏か土井氏におねがいしたいと思ひます。(福島・S生)

▼風奇の姉妹誌「風俗画報」の限定版を買い求めましたところまずオール・グラビアの大冊に

圧倒されました。よくもまあこんなに緊縛フォトを収録したものだときれ果てた次第です。

とにかく今まで両誌の緊縛フォトを見ていたせいか、どこに緊縛の責めに違いがあるのか、と思われるくらい迫真力の点においては申し分がありません。

ただ、あのように多くては、一つ一つの味がそこなわれるのではないでしょう。いうなれば、うまいものをいくら多く出されても味をギンミするわけにはまいりません。それと同じように、あの特一号秘蔵版に、いえないでしょうか。

といって、ページ数を少なくしてくれといっているのではありません。現在のページ数をそのままに、ずいぶん欲ばった話ですが、緊縛フォトだけに偏することなく、もっと緊縛に至るまでの種々のフォトをものせてもらいたいと思います。

たとえば、風奇のモデル嬢たちのヌードや、コスチュームをつけたもの、あるいはファンとモデルたちをいっそう親密に感じさせるような日常生活の写真など、いくらかでも素顔のモデル

嬢を紹介することができるとは、ないかと思ひます。

いずれにしましても、多少緊縛フォトには食傷気味なのがフアンの一人としての偽らざる心情です。勝手なことを申し上げましたが、よろしくおとりはからいねがいます。(大阪・M生)

▼無残絵師月岡芳年の一代記を貴誌に希望する読者です。

四、五月号にはよく江戸時代から明治にかけての無残絵を掲載なさっていたようですが、最近あまり誌上にみられないのでいささか不満です。現在、貴誌で筆をとっておられる画伯には大変失礼とは思いますが、やはり私などは、どちらかという、古い時代のけんらんたる血にいろいろどられた無残絵のほうがよいと思ひます。採用くださいますれば幸いです。

①姦通もの。自分の妻と年下の男の情事を知った男が、二人を縛り、年下の男の背中に刃物をつきつけながら妻の乳房や下腹部を噛み切らせて殺す場面。
②私刑もの。ありふれた想定でかまいません。ファンキー族のリンチ・ゲームとして、刃の

ついたストローでおたがいのからだに突き刺してどちらかが先に貧血を起こして失心するまで吸い合う。(小樽・K生)
▼伊藤晴雨氏の特集を企画してくださるのはどうでしょうか。オールド・フアンの一人士として期待できます。氏の五十数年にわたる緊縛史の一片を知ることができれば幸いです。

もちろん現在、風奇をはじめいくつかの類誌がありますが、真に緊縛感をもったフォトは、残念ながら見当たりません。氏の緊縛が古くさいとか、汚らしいとかいうのは卑見です。まして、現代的なセンスの緊縛などとうたって悦に入るなれば、全くナンセンスというよりほかありません。緊縛はあくまで凄惨であり、苦痛をとまわなくてはならないものです。ただ、ロープやクサリを用い、モデルもまた縛られていることに感情もない見世物的なショーとなつては、たしかに現在の緊縛モードショーはおしまひになります。その意味でも、伊藤晴雨先生の特集は意義あるのではないでしようか。(葉山・Q)

ニューフォトのセクシードレス

今、評判の当社のおしゃれ下着類各種

(例一)ベビードール型



(例一)

生地……ナイロンオーガ
ンディー
色……赤・黒・ローズ
サイズ……大・中・小
ナイロン透き通りパンテ
ィ付き

¥1,900 (〒100)

(例二)

当社独自のデザインにな
るビキニパンティ
生地……サテン、前レー
ス付き ¥500 (〒30)

(例二)ビキニパンティ



30円同封お申込み次第、各種ドレス・下着類のカタログ及び直接焼付け写真送呈

東京都杉並区大宮前6-412 ニューフォト社洋品部

既刊号のご案内

『斯界最高』『風俗奇譚』『画報風俗奇譚』本社在庫品が少なくなっております。バックナンバーはお早めに！

画報・風俗奇譚 第1集

好評のうちに品切れ

画報・風俗奇譚 第2集

(二八〇円)

多色口絵・池畔の愉悦

写真口絵・陶酔する女体八景

第1グラビア

鴨居づり・女の置き物

人間荷物・海老責め・水にひ

たされて・緊縛艶姿・脚立責

め・静かなる悦虐

第2グラビア

椅子しぼり・美囚六態・白い

人魚のもだえ・美しき人柱・

ベッドの残虐・亀の子しぼり

・四つの妖花

第3グラビア

暗闇のよろこび・犬になれ・

木に縛られて・座布団も責め

道具・さかさ海老づり・嗜虐

を待つポーズほか

海外残虐譚

人間をステーキにする

熱砂の砂漠(死の逃亡)

愛欲に狂う氷原の情炎

マゾヒチック絵画館

乗馬服の女たち

創刊臨時特集号

(売切れ)

艶妖特集号

(二四〇円)

多色刷口絵・かぎや店先(春信)

写真口絵・肌の十字架ほか

特集・サディズムの種々相

死体に処女を捧げた娘の話

現代女性の変態心理を衝く

蛇淫の怪(現代怪奇物語)

刑罰人の縄の掛け方(江戸時代)

白人女性を征服した黒人男性

嗜虐への誘い(告白)

女の黒髪に埋もれて死にたい

縄で縛った歓喜の抱擁

仮面舞踏会(伊国・四畳半)

王妃マユラの虐殺(インカ悲史)

種馬にされた男の話

変態演出考(ドサ回り告白記)

明治性的珍聞史②

妊婦を殺す変質魔(ある強殺事件)

犬により快楽を求める女

春の臨時増刊号

(二〇〇円)

妖異・猟奇艶笑特選読物25編

多色刷口絵・老女村岡

写真口絵・捕われの白肌ほか

二色刷口絵・小田利美画集

グラビア・責められる肌ほか

変態性欲考(ある性犯罪の分析)

魔の十三号室

死体を溶かす(科学者の犯罪)

女に奪われた処女

獣婚・女と犬(異常性欲)

舌を噛み切られた男

悪魔に肌を許した人妻の話

猫の怨霊(怪奇小説)

若い女の生肌をとる老婆

会員三百人の男色クラブほか

悦虐特集四月号

(一四〇円)

多色口絵・五彩のサタン

小田利美責め絵集

グラビア・美女緊縛ほか数十葉の

嗜虐編(変態の緊縛圧巻)

特集・鞭打の心理と実相

鞭打の心理(ムチ打ちの極致)

鞭打の歴史ムチ打たれる女たち

鞭打たれる悪魔のイレズミ

鞭打から生まれた愛情

焼け火箸の快楽死(小口末吉の妻)

人間と蛇との交情

地獄尼僧院(おそろべき実態)

火あぶり台の女(印度教徒の殉教)

縛りあげた女の可愛さ

情事の部屋(サド・マゾ)

ピストルを持ったサディスト

夜の淫魔(夏の夜の犯罪)

明治性的珍聞史③

女の死体に憑かれた男ほか

耽美法悦特集五月号

(一四〇円)

折込み口絵・空中人魚

口絵・女と動物ほか

グラビア・捕われの人魚ほか

特集・同性愛

同性愛の種類と実際

女性相男子の恋慕手記

同性愛少年が殺人を犯すまで

白い肌同士の陶酔

マゾッホの被虐待契約書

野獣の夜(フオトストーリー)

女の切腹その心理の分析

女だけに加えられる拷問

ハレムの残虐物語

女の人肉を食べた男

明治性的珍聞史④

吹上佐太郎の性の異常遍歴

性的イレズミ考ほか

嗜虐陶酔特集六月号

(一三〇円)

多色刷口絵・痛ましき祭壇

喜多川歌麿の艶画より

鈴木春信吾嬬土産より

グラビア・足づり裸女ほか緊迫写

真数十葉

特集・フェチシズム(淫物症)

マゾヒストの描いた女の絵
ズボンをはいた女たちほか
フォトストーリー・偏奇狂奇譚
絵物語・恋の一念、蛇となる
惨憺、目を覆う殺人現場
絵物語・狂恋吉弥責め
絵物語・ギロチン台の美女
アブノーマル絵画展
鞭打する人々
残酷なる刑罰

画報・風俗奇譚 (秘蔵版)

(二〇〇円)

多色刷写真・まひるの艶肌・盤
上の人魚・柱背負い
多色刷口絵・空中ハリツケ・白
肌への執念・宙吊り
責め絵集・田上恵子・小田利美
・江馬美久の凄艶無残画集

第1グラビア

二人無残・格子にはりつけら
れて・椅子の世界ほか

第2グラビア

裸女キリスト・竹で責める
投げ出された女ほか

第3グラビア

柱しぼり・格子責め・異虐図
絵・椅子の囚人ほか

アブチャック絵画館

コルセットをする女たち
乳房をしぼる女たち

フェチシズムの実態
毛に関するフェチシズム
排泄物に発情する
フェチシズムの源泉は嗅覚
女の下着に欲情する男
変態名画館(珍画・戯画)
浣腸に魅入られた女
変態王・燕山君(朝鮮秘史)
八十七個の洗濯バサミ
マゾヒストの手紙から
マゾ妻・二代目矢作ヨネ
刑罰はどのように変態的か
明治性的珍聞史⑤
黒い通り魔・女の乳房刺し
変態見世物絵まくり
レスボスの日はか

薫風特別号・夏の臨時増刊

(一八〇円)

多色刷口絵・無残石燈
アート口絵・江馬美久画集
グラビア・デヴァンの狼籍
ベッドの愉楽・受難の姿勢・綾
なすまだら縄・庭園の白魚・逆
さ椅子しぼり・裸女無残絵ほか
本誌秘蔵特写フォト百数十葉の
圧巻
世界怪奇残酷秘話
十代の悪の女王・白肌責めの絵
図・愛欲に狂う狼娘・花嫁を突
き殺したサドの夫ほかグロテス

ク読物数編

特集・変態性欲犯罪実録

俺のものをなめろ
淫楽殺人魔ランドリーユー
尼僧強姦魔・大米竜雲
マツチの火で毛を焼いて
サドとマゾ女の無理心中
男性チョン切り事件史ほか

怨羞無残特集七月号(一四〇円)

多色刷口絵・落花図絵
口絵・女のプリズムほか
グラビア・恋慕受縛・姐上の白魚
・肌もあらわにほか
海の怪物・山の怪物
特集・食人症
サディズムの極食人症
食人国物語
中国における食人奇譚
人間料理を食べた人々
死を賭けた遊戯(裁判記録調査)
鉄鎖・鉄環・鉄衣装責め
ソドム族(あるソドミアの告白)
若い女を硫酸で溶かす
ムチの下で陶酔する女
女忍者(戦国忍者の残酷秘話)
白肌をう毛虫(時代小説)
変態残酷物語ほか

幻妖異虐特集八月号(一四〇円)

多色刷口絵・緊縛二重奏
口絵・荒れ小屋の残酷・お針子の

受難・ウインチづり・つるべ責め
グラビア・スタンドの美女・柔肌
しぼり・竹責め・落花の閨・亀
甲しぼり・地獄に落ちた男・両
手づり・嗜虐の白肌・こぼれる
妖美・二つ折りほか
特集・レスビアンの実態
東西レスビアンの実体
レスビエンヌ
サディストとマゾヒストの往復書
簡(あなたの犬になりたい馬に
なります)

あたしの悦虐プレイ
男に加えられる責め
ひまわり——死体を肥料に
妖怪変化とセックス
化粧室談義(トイレット考現学)
真珠とり海女奇譚
明治性的珍聞史⑦
少年の臀肉切り・野口男三郎
若い女についた死霊
亡霊に復讐された男女
艶美悶悦特集九月号(一四〇円)

多色刷口絵・空中鞭打
原色写真・徹頭の裸女・つるされ
た白魚・女のポーズ
グラビア・裸女無残・落花の景
二人しぼり・柔肌責め・静かなる
地獄・投げ出された女ほか

(小説) 永遠の美と若さの泉・ザッヘル・マゾッホ

画報・風俗奇譚第4集

(一八〇円)

色刷写真・五輪石塔の前では口絵・白肌針責め・納屋の中はか凄艶緊縛無残画集

第1グラビア

水車に縛られて・水責めほか

第2グラビア

青い無残絵巻、ほか

第3グラビア

片足宙ぶり・縛られた肉塊、ほか

ほか

世界名作秘画誌上展覧会

絵物語・サドの悪徳の栄えほか

画報・風俗奇譚第5集

(一八〇円)

多色口絵・白い肌のいけにえ他

アート口絵・熱気むし、ほか

第1グラビア

憂愁のひと・まひるは静か他

第2グラビア

クサリしぼり、ほか

第3グラビア

ピアノのある風景、ほか

奇妙な絵画展覧会

絵物語・続悪徳の栄え

絵物語・ワナにかかった令嬢

絵物語・女密輸船

トリックによる残酷フォト

フォト・ストーリーII 奇妙な媚薬

ほか

特集・女装する男たち

男が女装するということ

女装マニアとその魅力

女装する男たちの生態レポート(かびや・かずひこ)

マゾヒストの手紙から③

奇妙な再会(アブ・ストーリー)

浣腸のいけにえ

悶える女

若年における異常の性態

変性男子ものがたり

暗黒街の処刑室(サド小説)

恋虐呪縛特集十月号

(一四〇円)

多色口絵・女体知恵の輪

色彩写真・美しき囚虜・あかり

も淡く・はなやかな受縛

グラビア・白衣の佳人・石だた

みの無残絵図・長椅子と女・浴

衣も乱れてはか特写スナップ

特集・サディストの群れ

残酷なるサディストたち・あ

るサドやくざの告白・ネクロ

フィリーの男ほか

私の緊縛の記録

犯罪からみたサディスト

地下室の吊り責め

生きながら焼かれる女

マゾヒストの手紙から④

明治性的珍聞史⑧

アブチック秘画展

全身くまなく刺青した男

復讐鬼(本格的サド小説)

裏切りの決算(異色小説)

ほか

凌辱無残特集十一月号

(一四〇円)

多色刷口絵・水地獄II土井啓子

女体責め絵・丸太小屋の惨・岩

場のハリツケII田上恵子

竹しぼり責め・射撃のマトII

小田利美の無残絵集

特集・戦争残酷の記録

拷問倉庫(従軍看護婦の悲劇)

憲兵狩り(終戦残酷秘話)

伊予富士の地獄地帯

写真・戦争残酷の記録

百二十二人の集団ハリツケ

ビルケナウのたそがれ

ほも禁秘帳①・少年愛の人びと

マゾヒストの手紙から⑤

男をいじめる女・写真集

あたしの乗馬日記

女の下着に憑かれて

冷房用女体ベット(秘境ポルネ

オにくりひろげられた怪奇実

話)

死美人館潜入記(香港の死の魔

窟で見た恐るべき人骨製造者

の実態)

アブ・ストーリーII ひっぶ・え

んど・はいひる

火責めにされた女

グラビア

犬の首輪のブラジャー吊るし

責め、ほか本誌がはじめて蛇

を用いた凄艶無類の緊縛フォ

ト二十四ページの圧巻

秘蔵版風俗画報

風俗画報第1集

全巻総グラビア百五十余ページの豪華大冊! 集録した累縛フォト二百枚九人のモデル競って熱演妖艶凄絶のオール迫真場面集! 正に決定版中の決定版の強力第一弾!

(五〇〇円)

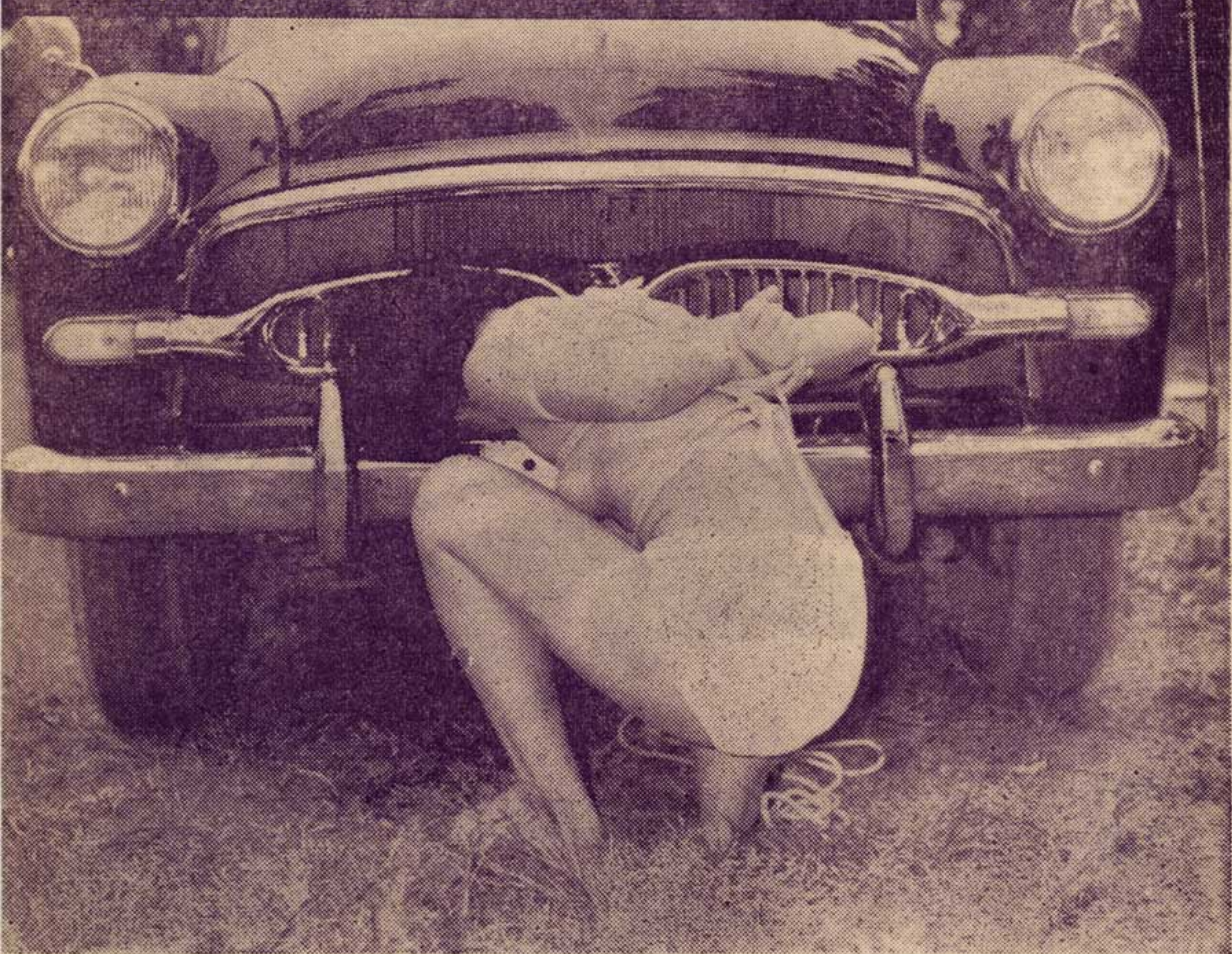


風俗画報第2集

座右に一冊備えれば、望みのときにその異常美の世界にあなただけを導き、いつでも心から堪能できる境地を現出する緊縛フォト。加えて一流画伯による責め絵の絢爛たる絵巻

(三〇〇円)

フォト・ストーリー 恐怖のドライブ



△1▽

ユリを乗せた車は、深夜の千葉街道を八十キロのスピードで東へ走った。ユリは自分なんの目的で二人の男に連れ出されたのか見当がつかなかった。

クラブのラスト近く、彼女のパトロンK氏から電話を受け、車を回すから乗るようにとの連絡はあったが、いつものK氏のナッシュ59年型とは異なり、くたびれたクラウン車であることを不審に思ったが、二人の迎えの男の丁重な物腰に、つい気を許したのが、いま思えば不覚だった。その証拠に、ユリがクラブを出たあと入れ違いにK氏からの車がやって来たからだ。

深夜の千葉市は場末のうらさびしい家並みの連続だった。ユリは右腹に当てられた小型コルトの銃口に口も聞けないくらい恐怖を感じていた。

「口を聞くなよ、ねえさん」
ドスのきいた男の口調が、ユリの全身を押しつぶしていった。

「オレの言ったことを忠実に答えるんだ」
車は千葉海岸のひどい道を走りはじめた。
「お前はKの情婦だろう」

ユリはうなずいた。愛人といってもらいた
いところだが、口答えはいたずらにケガのも
とにもなりかねない。

「香港銀行にあるK
の私書函のナンバー
を知ってるはずだ」



ユリは男のたずねるKの香港銀行の私書函と聞いて、自分がなんのために連れ出されたかがしだいにわかって来た。

Kは中国人だった。彼が表向き貿易商として滞日しているが、ユリの知るかぎり、別段日本商品を買付けしている様子もない。ホテルで会うときも必ず、あまり人相のよくない男たちがとり巻いていた。Kがベッドの下にピストルを置いてあるのも知っていた。

そういえば、運転している男に見覚えがある。その男は耳のうしろに一円玉の大きさの黒いアザがあった。アザだけなら少しも珍しくない。そのアザに二本の白い毛が十センチもヒョロヒョロと伸び切っているのだ。

「Kはお前を私書函に行かせたはずだ。カギはお前を人質にKから引き替える。しかしKの奴は、お前を拉致しても信じない。そのために私書函のナンバーを聞くのだ。さあ、この凸凹道が終わるまでに答えるんだ」

たしかにユリは私書函のナンバーを知っている。しかし、もし知らせたら、こんな男たちよりもっと恐ろしい私刑がKによって加えられることを知っている。

ユリの前の情婦であった中国人の美李芳は彼を追って香港からやって来た夜、ユリの目

の前でキニーネを打たれて半死半生の目にあい、多摩川べりに死のドライブに出かけた。

死体は川底に沈んで、二度とふたたび、浮かび上がらなかった。

△2▽

黄色く死のけいれんにひきつる美李芳の顔が、ユリによみがえった。

「知るもんですか。Kさんは仕事のことなんかあたしに、何一つしゃべる男じゃないわ」

ユリは、夜が明ければ人目について助かるものと信じ、強気に出た。

「フン。さすがはK



の惚れた女だ。ちょっとやそっとじゃ、しゃべるような女じゃない。おい車を止めな」



松林のなかに車は止まった。

「降りるんだよ」

したたか腰のあたりをけられたユリは、ほ
うり出されるように、手あらく、車から出さ
れた。

「暗くても見えるだろう。お前の好きな枝ぶ
りをみつけな」

二人の男は、ユリを路上にねじ伏せて、両
手をくくった。

「Kが知ったら、あんたたちを生かしておか
ないわ」

「あたりまえよ。生命が惜しくて殺し屋にな

れるかい。さあ、こっちへくるんだ」

凸凹のはげしい道をひきずられてゆくユリ
のからだは、たちまち石ころのすれあうたび
に服はちぎれ、ひどい痛みが加わった。

「もう一度聞け、ナンバーを言いな」

殺気に満ちた男の表情に、ユリはふるえ上
がった。

「ほんとに知らないのよ。Kに聞いて」

「そうかい。じゃ殺るぜ」

男は手ごろの松の枝にロープを吊るし、そ
の端をだらりと下げてユリの首に巻いた。

残忍な油汗が二人の男のひたいにべっとり



と夜目に光った。

二巻きのロープがぴんとユリの目の前で張りつめた。

「行くぞ」

ユリは恐怖に叫ぼうと、全身をふりしぼった。しかし声は、しだいにしまってゆくロー

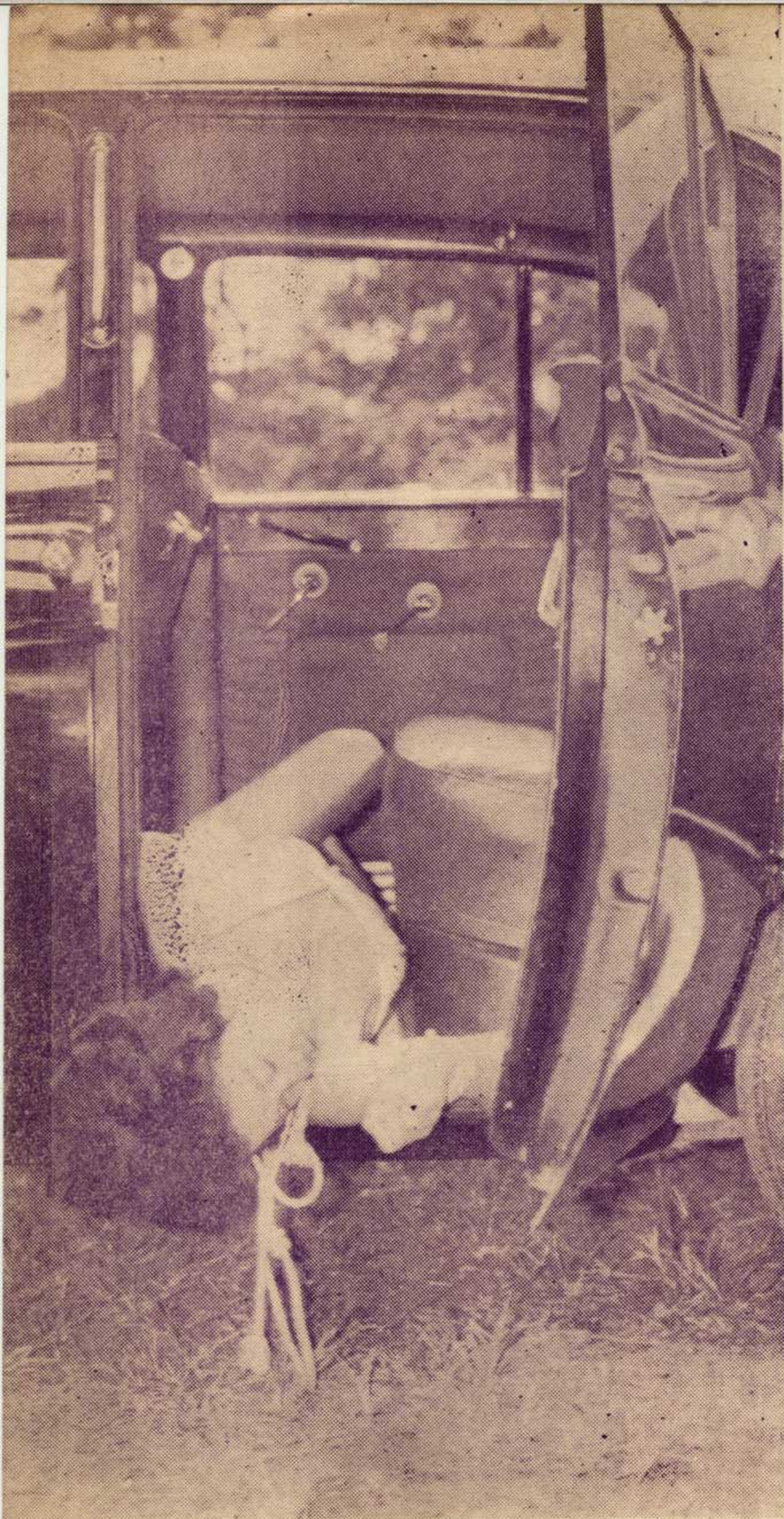
プの厚みにとぎれ、涙がボロボロとあふれた。金魚のように口はただパクパクとゆっくり開きはじめた。

「この辺にしとこうぜ」

ロープを離すと、ユリのからだは前につんのめった。

太い松の枝にぶら下げられて、ユリは身をもがいた。身をもがいたところで、どうなるものではないと思いつつも、恐怖の感情と生への執着が、そうさせたのだ。

そのうちユリは、薄れゆく意識のなかで何か叫んだが、そのまま気を失ってしまった。



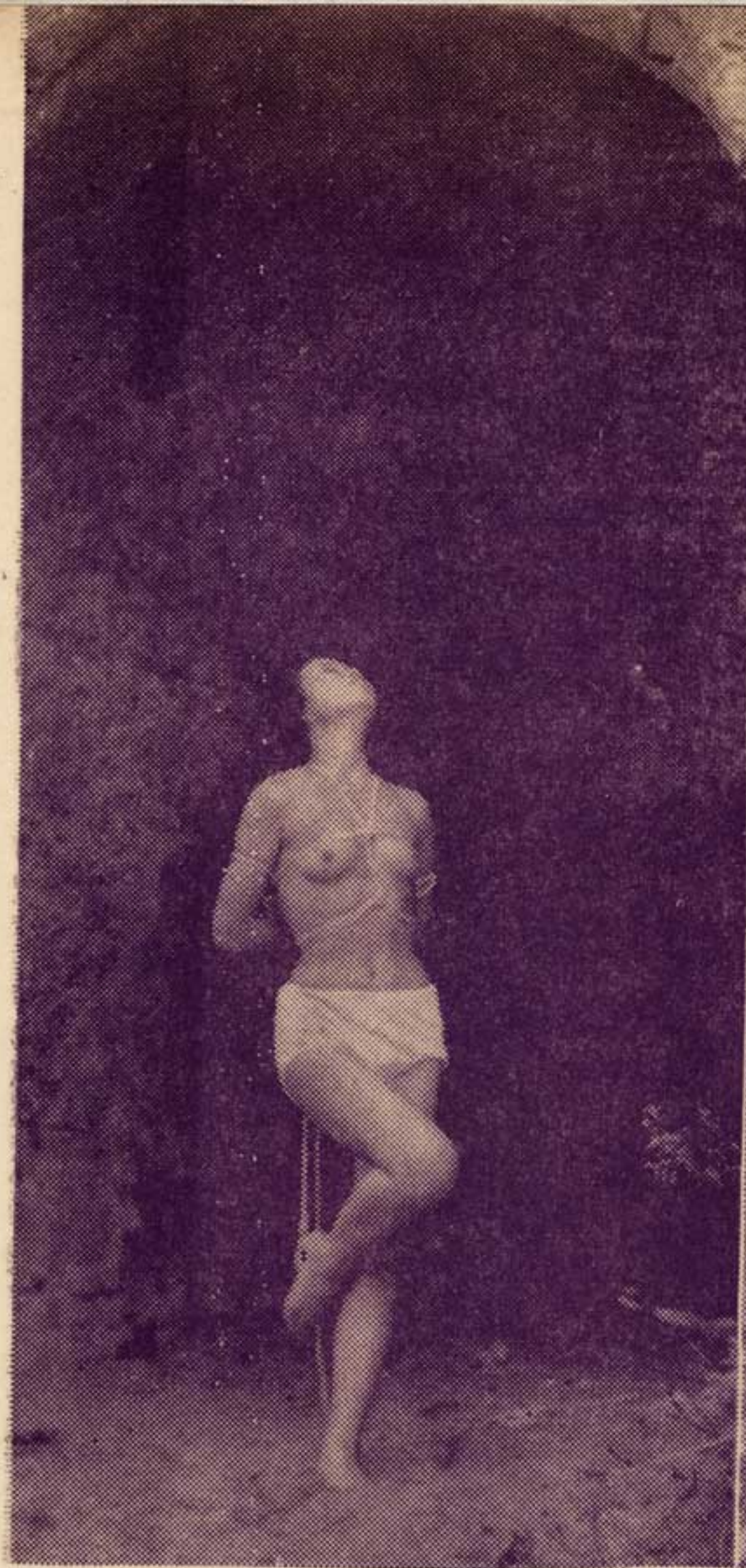
△ 3 ▽

長い時間、ユリは恐ろしい夢をみていた。地獄の鬼どもが、大地にくくりつけたユリの両足を一生けんめいひっぱっていた。

メリメリと不思議な音を立て、下腹のくびれから下が引きちぎれて大腸が飛び出した。

「あーっ」

このユリの見た夢はウソではなかった。あいかわらず車は凸凹道を走りつづけていた。ユリはエビのようにくくられて転がっていた。



た。そして、もっと耐えられないことは、いつの間にか服も下着も身につけていないことだった。気のついたユリを見おろしながら男は、靴の先でユリの秘所をこづきはじめた。

「許してッ、止めてーッ」

必死に哀願するユリの口に、こんどはユリのハイヒールがとびこんだ。

夜がしらじら明けはじめるころになってようやく、車は、岬に通ずる小高い丘に止まった。ドーム型の巨大な石穴が黒々とつづいている。



ふたたびユリは地面を引きずられ、その石穴のなかに連れ込まれた。

「生きたいのならナンバーを言え。オレはお前をここで殺すつもりでやって来た。ちゃんと、お前に入る穴もある、埋めてやろう」

ユリは首をふった。思考力を失いかけた現在ののぞみは、生きることだけだ。

「言うわ。その代わりこの縄をほどこいて」

「よし、ほどこいてやろう」

ユリは、男の手がロープにかかったのを感じていった。

「PK一〇四」

一人の男が車を走らせて行った。

「十分である車が戻ってくる。Kとの取り引きだ。あのナンバーが確かなら、オレたちは二万ドルのペイを手に入れることができる」

ユリはもうどうでもよかった。Kがその取り引きに応じる男でないことを知っている。しかしナンバーさえ教えれば、Kも自分を助けるだろう。九対一の賭けに等しいが――。

確実に十分後、車が戻って来た。

「Kは香港へ発った」

一瞬、ユリは硬直した。絶望した二人の男は、ユリを抱き起こすと、死の穴倉に引きずりはじめた。

△志田 悦郎△

演劇・緊縛ア・ラ・カルト



艶麗しぱり模様



ゆもじ一枚の花はずかしい姿態で 縛られたり吊られたりだが この残虐行為には 妖美なお色気がただよう



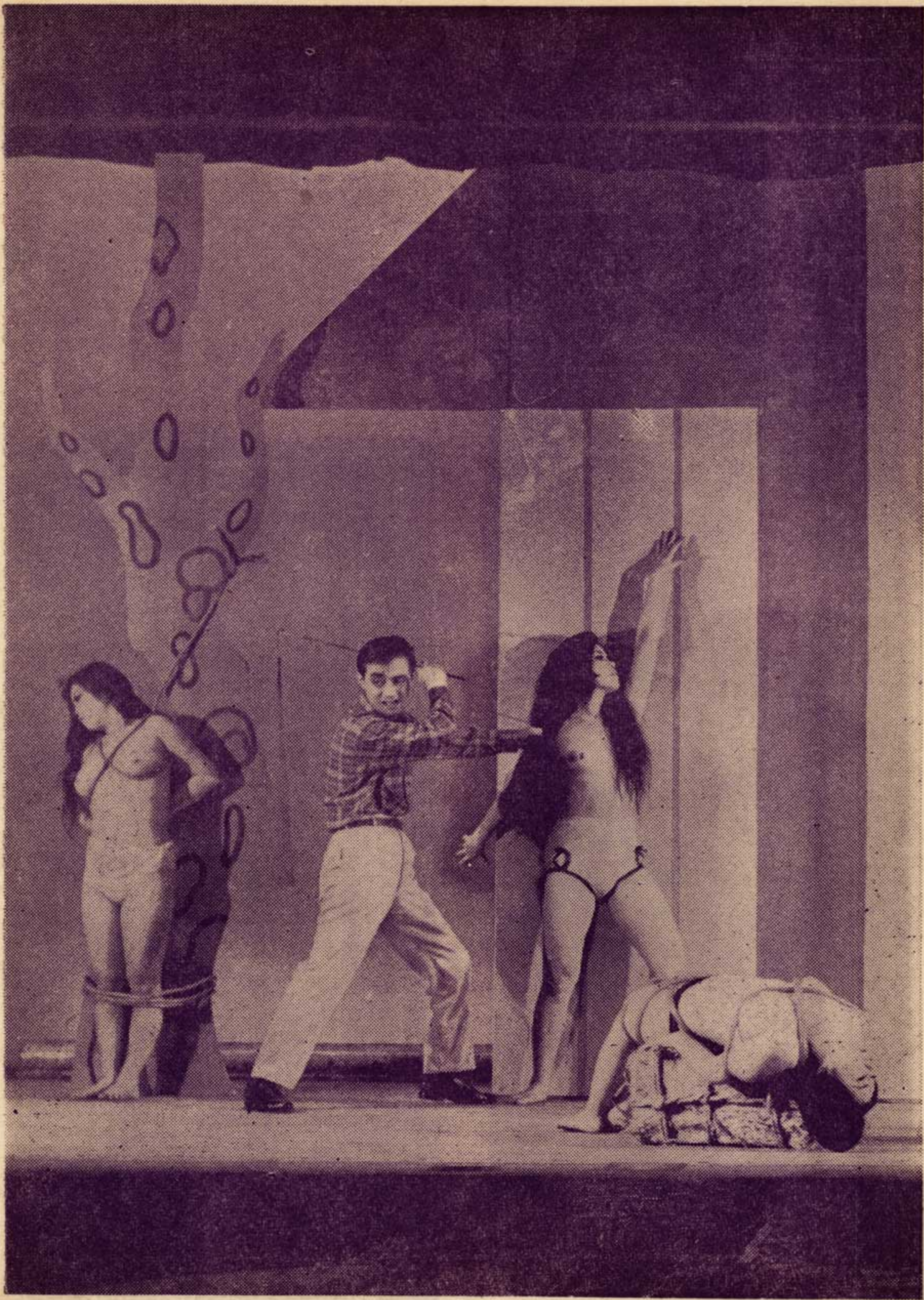
しぼられた女が六人 みんな湯もじ一枚のあ
られもない姿態で 立たされたり 転がされ
たり——これは 江戸風なお色気しばり風景



緊縛裸女群像

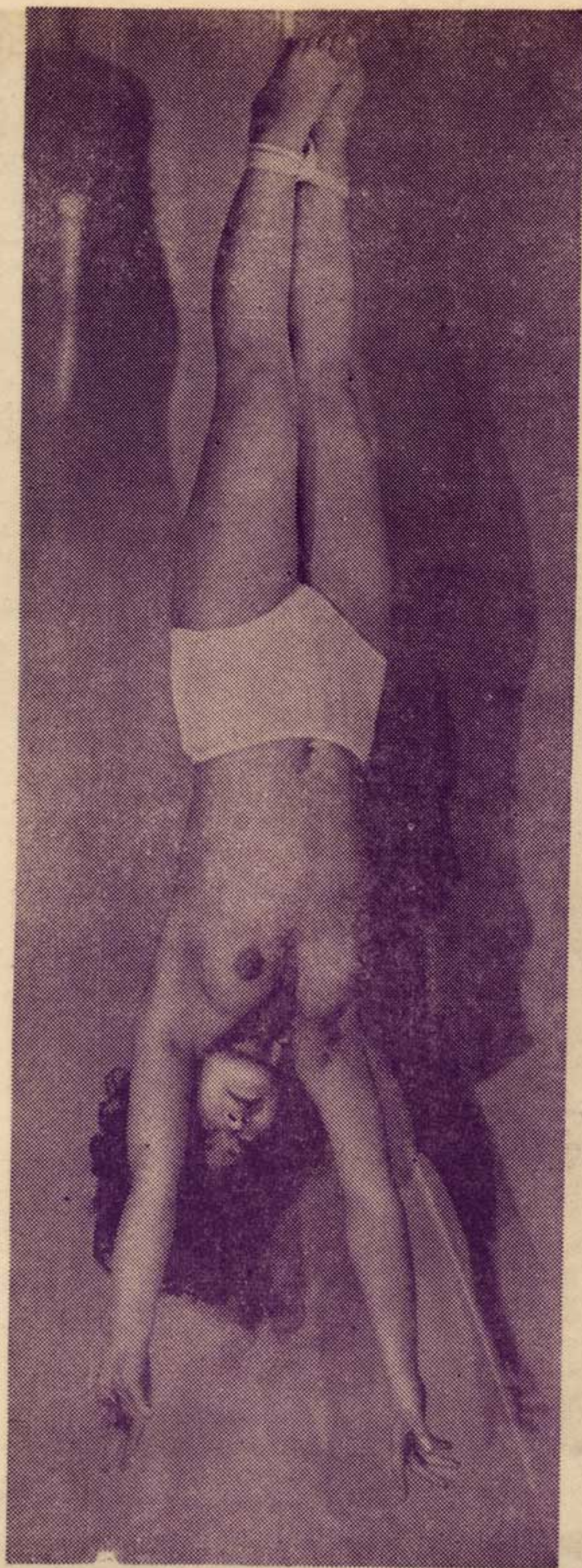
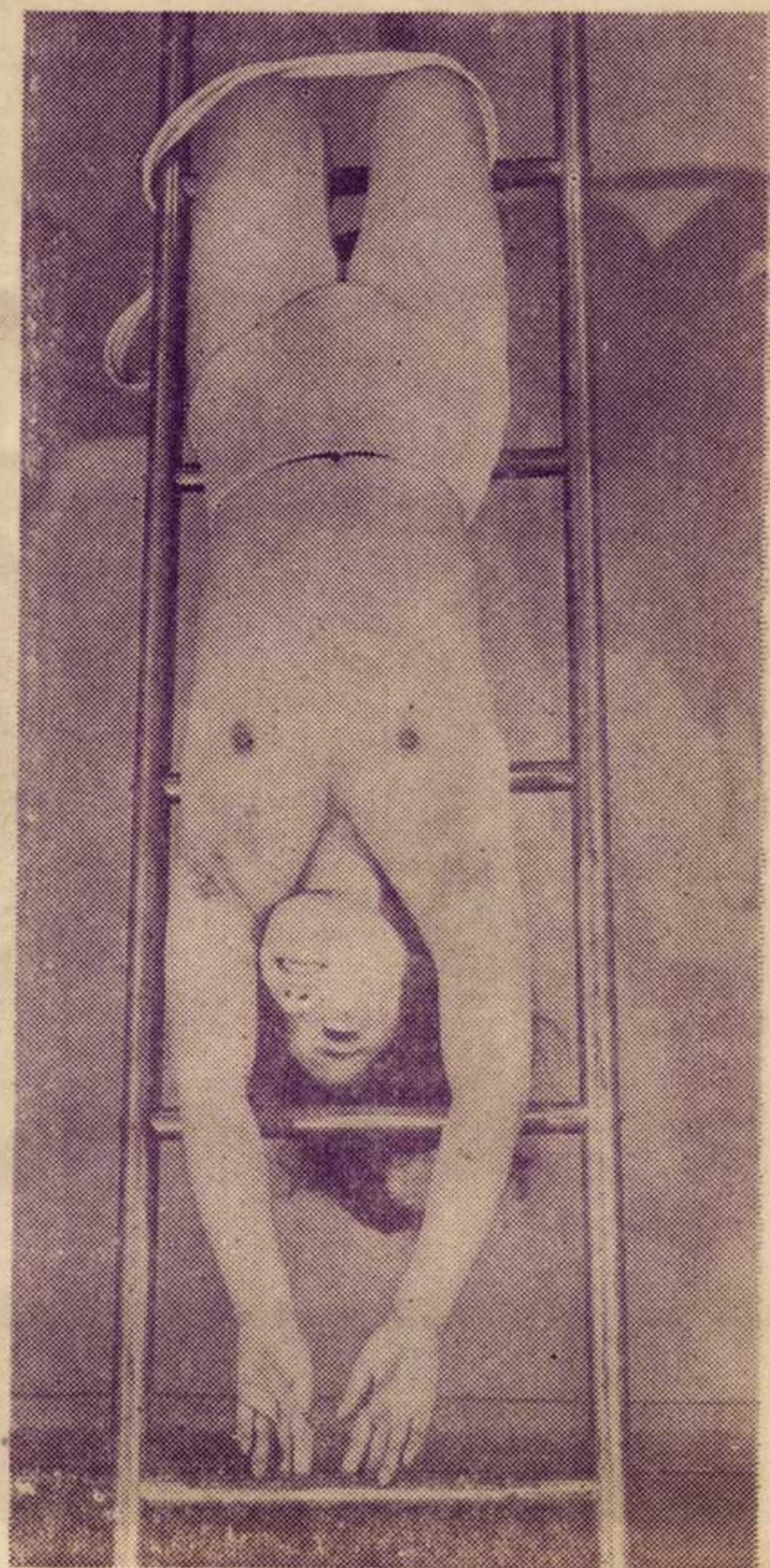


いろんな形にしばられて いろんなところに
立たされたりすわらされたり それをはじか
らムチで打つ 男みょうりか サドの天国か



片っ端からムチで打つんだ

さかさ吊り3態



さかさ吊り3態



まわる水車にくくりつけられ 衣装も乱れてクルクルまわる ああ 残虐のお仕置
き そうかと思うと 足首をゆわえて思いきりグッと宙づり あるいは ハシゴに
くくりつけてのさかさ吊り さて このあとは どんな責めが用意されているのか

ク
サ
リ
巻
き



クサリは冷たく身にしみる クサリはキリキリ肌を噛むと
ころがあたしはそれが大好き クサリの苦痛のそのなかか
ら 誰にも言えないよろこびが フツフツと湧きいでる